
ヤンデレ逃避行 ～逃げた先は異世界～

桜庭 憂鬱 （元ミヤナリ）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヤンデレ逃避行 ～逃げた先は異世界～

【Nコード】

N5426Y

【作者名】

桜庭 憂鬱 （元ミヤナリ）

【あらすじ】

運動神経だけがとりえの俺、秋田亮介は典型的なヤンデレの少女に追いかけられ、その途中で異世界へと通じるワープトンネルに入ってしまう。

抜けた先は言語も地理も分からない異世界のとある荒地。そこで出会った何故か言葉の通じる老人が言うには、俺はこの世界で唯一異世界トリップを行える少女の魔法によってこの世界に来てしまったらしい。元の世界に戻るには、もう一度あの少女に会う必要があるらしい。

だが、俺は命が惜しかったので、とりあえずこの世界に住み留まることにする。そうして、俺のヤンデレ少女から逃げる日々が始まりを告げたのだった。

現在、改稿を行っています。六話まで終了しました

ブローグ

「ねえ、私のこと可愛いつて言ってくれたよね？ あれは嘘……だったの？ まさか、あなたに限ってそんな悪趣味な嘘を吐くわけないよね？」

「お、俺が悪かった！ 許してくれえッ？」

俺は白昼の町中を包丁を持った一人の少女から逃げるために走っていた。学校指定の室内シューズを履き、とある私立高校の制服を着たままで、迫り来る恐怖に顔を歪めながら。

今の俺にどんな状況が科せられているのかは、本人である俺にも分からない。

さっきまで俺は、学校で友達とテレビ番組について適当に駄弁っていた筈だった。しかし、転校生として少女が教室に入ってきた途端に、いつの間にか地獄の鬼ごっこは開始の合図を告げられていた。靴を履き替える時間すら許されず、暗器の達人なのか、何処から出てきたのか分からない料理用具を持った少女の笑い声を後方に感じながら、俺は学校を飛び出していた。

その問題の少女とは、赤色という常軌を逸した髪の毛を後ろで一つに纏めている美少女だった。教室に入ってきたときは、髪は結われておらず、多少ウェーブの掛かったロングヘアを晒していたのだが、走りやすいようにポニーテールにしたのだろうか。

だが、いくらポニーテールにしたとはいえ、垂れ目で穏やかな印象をした少女が、五メートルを六秒台前半、調子の良い日は五秒台で走れる俺に涼しい顔でついてこれるものなのだろうか。『ポニーテールによる脚力向上』について考察をレポートに纏められるような猛者がいるのなら、是非とも学会で発表してほしいものだ。その暁には、陸上大会の女子の部では、後ろ髪を一つに結わいている少女たちが溢れだすに違いない。ポニーテールフェチの人間には

堪らなさそうな話だ。

ともかく、俺は少女に追われている。

そして、その少女は嬉々とした表情で、口を開く。

「何で？ 何で私に許しを請おうとしてるのかな？ 別にこっちに来てくれれば私は何もしないんだから、ねえ早くこっちにおいでよ」
「ふざけんなッ？ 自らの命を捨てることなんて出来るか！」

そう言いながらも、元々短距離型だった俺に長距離を全力で走るのは苦に他ない。現に俺の息は少しずつ乱れていつてるし、彼女との距離もそろそろ埋まろうとしている。

しかし、ここで追い付かれたら恐らく、俺が無怪我で笑顔を振り撒きながら家に帰れる可能性は希薄、いや、皆無となるだろう。

俺は自分の筋肉をどう痛めるようになったとしても、これから先は只管命を優先することだけを考えることにした。すると、少女と俺の距離は奇跡的にも少しずつ開いていった。これが火事場の馬鹿力というものなのだろうか。

すると、何故か俺の両目から涙が噴き出してきた。それは、慣性に従って、吹き抜ける風と共に後方に流れていく。

また、無意識にも口元が綻び、ヒヒヒ……、という不審な笑みが漏れる。あまりの恐怖から、頭がどうかしてしまったのだと思う。

「何ですよ？ 何で私から逃げようとするの？ 私のことを一生愛してるって言うてくれたのはあなたなのに、どうしてあなたは私から離れようとするの？」

俺は全力で走りながら涙で顔をクシャクシャにしながらも、自分が彼女に対して放った言葉がどんどん過大化されていることに気付き、驚愕と動揺を隠せなかった。

そもそも、俺は彼女が自分の机の横を通る際に、小声で可愛いな

としか言った記憶が無い。それなのに彼女の視点からすると、俺はいきなり少女に向かって愛の告白をしたことになっているそうだ。それが今回の原因を招いたというのであれば、俺は学校にいた時の自分の顔を思い切り殴ってやりたい。

それよりも、俺は薄々と違和感のようなものを感じていた。町中で包丁を持った少女が走っているにも関わらず、誰も驚いたり叫んだりすることがないのだ。いや、それ以前に俺が走る道には人が一人たりとも歩いていないのだ。

町はまるでゴーストタウンと化していた。それはつまり、俺のこゝとを助けてくれる人間が一人もいないということの意味する。何故、そうなっているのかは分からない。だが、俺はつくづくと神様に嫌われているようだ。

しかし、段々と俺と少女の差は開いている。相手がいくら基地外な思想を持った少女だとしても、追いつかなければ最低でも死ぬことはない筈だ。

すると、後方から鈍い輝きを放っている何かが、俺の横を直線上に飛んできた。

「……！？ うぁッ！」

追いつかれなければ大丈夫。数秒前の俺を鼻で笑ってやりたかった。

後方から物凄い勢いで俺の横を通り抜けたのは、彼女が持っていた包丁だった。決して当たりはしなかったが、彼女は俺のことを本当に狙っていたに違いない。まだ、俺から離れた場所に向かって投げたのであれば、それは脅しなんだと勘付くことができる。しかし、包丁は俺の左耳に掠るか掠らないかの境界線を飛んできたのだ。脅しでここまでするほど、彼女がギャンブラーだとは到底思えない。

体中の毛穴から冷汗が噴き出してくる。風も急に冷たくなったように感じ、体中がスースーとした。俺の目からはもう、涙は溢れて

いなかった。いや、渴き切ってしまったのだ。

しかし、それだけ泣いたにも関わらず、追い討ちのように、事はそれだけで済まなかった。

「……し、しまった！ 危ない！」

後ろで少女が何かを叫んでいた。俺は一回だけ少女の方を振り向く。彼女はまるで絶望に満ちたような表情で、走るのをやめていた。俺は、一気にここで離すしかない、と前を向いてラストスパートの櫓を入れようとした。だが、俺の表情は前に意識を向けた瞬間に、完全に固まってしまった。

俺の視線の先には歪んでいるのか、まるで枠線が波を打つよう揺れている空間の穴が、地面に対して垂直上に存在していた。その中は、まるで、生き物の口の中みたいに薄いピンク色をしていた。よく、SF漫画などで登場するワープ空間などに酷似していた。

いや、もしかするとワープ空間そのものではないだろうか。俺はそう感じた。

どっちにしろ、俺が全力疾走をしている以上、その穴を回避することは不可能なようだ。

「う、うあああああッ？」

俺は自分が出せる精一杯の声で叫んで恐怖を紛らわせながら、勢い良くその穴の中へ飛び込んだ。只管に手と足をバタつかせながら、何処まで続いているのか分からない穴の彼方へ向かっていく。

「これじゃ、また彼を一から探さなければならぬよ。でも、私たちの愛の絆は決して簡単に破れるものじゃないから大丈夫だよ。だから、私のことは心配しないで待っててね」

少女は落胆したように溜息を吐きながら呟いた。

少女は、まるで穴のことは気にしていない。更に、自分がこの穴を出したとでも言わんばかりの振る舞いをしている。

そして、少女はパチンと指を鳴らした後、走り幅跳びでもするかのように、穴の中に入り込んだ。

その穴は、二人を飲みこんだと同時に、ファスナーを閉めるかのように、下から除々に消えていった。

第一話 ここは異世界

「……んっ。あれ……………ここは……………」

目を覚ますと、自分がふかふかのベッドの上で寝ていることに気づいた。乾いた木の匂いがするベッドと純白で厚みのある掛け布団は、一度中に入ってしまったら中々抜け出せないほど心地よい。

それにしても、ここが何処なのか分からない。壁は木製で、ログハウスだと思われる。中には冷蔵庫や洗濯機などの電化製品は一つも置かれていない。机や椅子も直方体の木をそのまま組み立てたような簡素なものばかりだ。

その椅子に白い髭を蓄えた老人が座っていることに、俺は気付いた。ゆっくりと上半身を起こすと、老人は俺が起きたことに気が付き、こっちに寄ってきた。全く面識の無い人物だ。

老人は俺に話し掛ける。しかし、日本語でなければ、英語でもない謎の言語で、何を言っているのか全く分からなかった。

「あんたは誰……………」

「……………又ウ？ オヌシ、ニホンゴヲハナセルノカ！？」

とりあえず、俺は日本語で老人に問い掛けると、老人は酷く驚いたような表情を浮かべて、その後片言の日本語で俺に問い返してきた。まるで、何十年も日本語を使ってなかったような話し方だったが、ちゃんと言葉は通じるようで、俺は安堵の溜息を漏らした。

「まあ、俺は日本人だから。それで、俺は何でここにいるんだ？」

「……………」

俺は見ず知らずの老人に自分が介抱されている理由を本人に尋ね

た。すると、老人は一気に表情を暗くさせて、黙り込んでしまった。俺はそんな老人の姿を見て、訝しげに首を傾げる。

「そういえば俺、今まで何をやってたんだっけ……」

木製の家の中は非常に暖かく、とても気持ち良かったのだが、その悩みのせいで妙に落ち着くことができなかった。何故か、ここに来る前、俺はとても恐ろしいものに襲われていた記憶が微かにあるのだが、それが何なのか詳しく思い出すことが出来ない。まるで、取り出したいものが引き出しの中に入っているにも関わらず、鍵が掛かっていて開けられないようなもどかしさがある。

しばらく考えていると、老人が重たそうな口をゆっくりと開いて、俺に衝撃的な言葉を告げた。

「オヌシハ、アノイチゾクノマツエイニヨツテココニツレテコラレタ」

「一族の末裔……なんだ、それは？」

「オヌシ、ヒイロノカミヲモツタオナゴニアッタダロウ？」

「緋色の髪の子………あつ！」

そこで俺は今まで何をしていたのかをきっぱりと思い出した。閉まっていた引き出しの鍵がガチャリと開く。

出来れば思い出したくは無かったのだが、俺は包丁を持った頭のとち狂った少女に追いかけていたんだ。しかし、そいつとこの地に一体、何の関係があるのだろうか。

「アノオナゴニハサマザマナセカイヲカケルチカラヲモツテイル。オヌシハソレニマキコマレタノダロウ。シンジラレヌトハオモウ。ダガ、コノサキイキテイキタイナラ、ワシノイウコトヲシンジルノガイチバンダ」

片言で聴きづらい言葉ではあったが、俺の耳にはその意味がハッキリと伝わった。つまり、俺があの方に潜った謎の空間は、世界と世界を繋ぐトンネルのようなものだったのだ。また、それは俺が異世界にやってきてしまった、ということも意味している。

しかし、老人の言う事はどうしても信じ難かった。いきなり少女に追いかけて、命の危険を察知して、そして異世界にトリップしてきて。こんな次から次へと忙しい出来事に遭遇して、俺の脳がまだショートしないのが不思議なくらいだ。

だが、老人は俺が話を信じていないことくらい分かっていたようだ。すると、彼は人差し指を上突き出した。

いきなり何だ？ と俺は首を傾げる。その瞬間、老人の人差し指の少し先から小さな火が出現した。勿論、彼はライターもマツチも持っていないかった。俺は驚きのあまり、目玉が飛び出してしまうくらい目を見開いた。そして、老人の細い指から為される奇跡に、俺の目はすっかり奪われていた。

「コレデスコシハシンジテクレタカノ？ イマ、ワシガヤツタノハ『マホウ』トヨバレルギジュツジャ」

「おい……マジかよ。でも、これ手品に使うマジックフィンガーじゃないだろうな？」

それでも俺はまだ異世界にいることを信じる事ができなかった。すると、老人は困ったような表情を浮かべて、今度は人差し指から吹き出すそれを火の玉状にして、空中で自由自在に操り始めた。まるで、墓地に出没する火の玉のようで、少し神秘的にも感じられた。これを見せられては、俺は老人の言葉に反駁することは出来なくなってしまうた。

「まあ、疑ってばかりもいけないからな。少しだけは信じることに

しよう。それで、元の世界に戻る方法はあるのか？」

「ヒトツダケアル。アノオナゴニタノムシカナイ」

老人は俺の質問にあっさりと答えてくれたが、その内容は俺にとって不可能なものだった。

「え……？ あの女に頼む？」

「ソウダ。アノチカラヲツカエルノハ、イマデハアノオナゴダケ。モトノセカイニモドルニハ、アノオナゴノチカラヲツカウシカナイ」

最悪だ、と俺は無意識にも呟いていた。

俺を殺そうとした奴に、もう一回会って元の世界に戻してください、と頼まなければならないのか？ それは自殺行為にも甚だしいだろう。もし、もう一度あの少女に会って、今度こそ心臓を包丁で刺されたりしたらと思うと恐怖に身が震える。俺の顔からは血の気が引いていた。

「ソレガダメナラ、コノセカイデスゴシカナイ。ワシノイエデイイナラ、オヌシヲスマワシテモヨイ。ココデアエタノモナニカノエ ندا」

「まあ、そうするか。少しだけこの世界に留まって、それから先の事は追々と決めることにする。俺だって、命は惜しいからな……」

「ソウカ。デモ、ヒトノイエニスムナラ、ソレナリノシゴトハシテモラウゾ？ イイナ？」

「まあ、住まわしてもらう身だからな。そんなくらいはお安い御用だ」

正直、これから異世界で暮らすということに不安を隠せずにはいられなかった。何の知らせもなく、無人島で無期限生活をしなさいと言われても、素直にうんと頷けるわけがない。

しかし、今の俺にはそれ以上に、あの少女に対する恐怖がある。

あの時、俺に向けられた輝きの無い瞳。軽く瞼を閉じるだけでも、それが鮮明に浮かんでくる。今すぐに、あの少女に会いに行くのは危険だ。

だから、俺はまずここで生活をしながら、そのうち帰るか残るかを判断していきたくと結論付けた。

そして、俺の異世界ライフは幕を開けたのだった。

第二話 訓練

俺が『リベルタス』という異世界にやってきてから、今日で丁度一年となった。俺が住んでいるのは、遠くの街から流れるようにしてやってきた訳有りの人間たちが暮らす辺鄙な邑落だ。とにかく何も無い場所で、ここに暮らしていて楽しいと思つたことは数えるほどしかない。ただ、その中の一つに、俺がこの世界の言葉を話せるようになったことが含まれている。

ここで使われる言語は舌遣いが非常に難しいのだ。もし、ジジイの徹底指導が無かったら、村の住民と話すことなんて出来なかっただろう。ちなみにジジイというのは、俺が最初に出会った、白い髭を蓄えたあの老人のことだ。彼は最初、日本語をずっと使っていなかったため、少し片言になっていて聴こえづらい発音をしていたのだが、今では流暢に会話を出来るにまで至っている。俺は、彼と二人きりのときは日本語で会話をしているのだ。

また、俺が初めてこの世界にやってきたとき、ジジイが俺に見せてくれた魔法は、この世界で練習を詰んでマナを自由に扱えるようになったものにしか使えないらしい。

マナというのは、この世界にある霊的物質（実態を持たない物質のことをいうらしい）の呼称だ。

無論、地球では魔法を使うことはできない。何故なら、地球にはマナが存在しないからだ。

しかし、俺をこの世界に引きずり込んだあの少女みたいに、地球でも魔法を使える方法があるらしい。体内にマナを吸収する方法らしいのだが、詳しいことはあまり分からない。ちなみに、俺もこの世界に来て魔法を学んでいる。勿論、ジジイには到底及ばないが、それなりに基礎の魔法は使いこなすことができる。

それにしても、俺がこの一年で取り入れた情報は莫大だ。様々な食料や生活用品の相場や、この地の文化や宗教など、俺もそろそろ

この世界で適応できるようになってきた。今では、ジジイがついていなくても、一人で買物ができることができる。まるで、小さな子供のようだが、慣れない土地で買物することは非常に難しい。外国の店に入るのを、気まずいと感じるのと一緒にだ。

俺は、まだ地球に帰るかここに残るかの判断をしていない。実は、ここで暮らしている内に、この世界も悪くないと思えてきたのだ。住めば都とはよく言った諺だと思う。

俺が角張った簡素な椅子に座っていると、さっきまでベッドで眠っていたジジイが覚醒するなり、俺の名前を呼んだ。

「亮介、そろそろ飯にするから、狩りにでも行くか」

ジジイの用件は狩りに出かけるからとつと準備をしろ、というものだった。この村の食料は、ぼつたくりにも等しく高価な値段で売られている。そのため、俺たちは外で狩りをして、捕った獲物で腹を満たしているのだ。魔法の訓練にもなるので、一概に面倒臭いものとは言えない。

「分かった。すぐに支度する」

俺は立ち上がって、狩りに出かける準備を始める。これを怠ってしまうと、狩りで怪我をしてしまう場合もある。

この世界には魔物と呼ばれる生き物が存在する。マナを異常に吸収し過ぎて、凶暴化や巨大化、突然変異を起こした生き物のことだ。普段は山や海など人が住まない環境に棲みついているが故に縄張り意識が高く、油断をしていると襲われ、喰われる危険性もある。

だが、魔物はマナを多く含んでいるので、魔法を使う人間などにとって魔物の肉は重宝されている。都合の良い話だが、人間はマナに強い種族らしいので、過剰摂取しても魔物化する心配はあまりしなくてもいいらしい。

本当の話をする、俺は魔法使いではなく剣士になりたかった。地球にいた頃、俺はファンタジーのゲームをやったり、漫画を読んだりしていて、巧みに剣を振るう姿に憧れを持っていた。

ある日、俺が剣士になりたい、と溜息を吐くように呟いていると後ろからジジイに杖で思い切り叩かれた。剣士になりたいなんて簡単に言うんじゃない、と彼は眉間に皺を寄せながら、鼓膜が破けてしまうくらいの怒声を浴びせてくれた。

今でも、俺がジジイに説教された理由は分からない。俺は理不尽なことが嫌いなので、あれ以来剣士になりたいと口で言うことはしていない。心の中ではいつも思っている。

そんな昔のことを思い出しているうちに、俺は準備を終えた。それが嫌な記憶であったせいか、少し不機嫌な声になりながら、ジジイを呼ぶ。

「さて、支度が済んだ。さっさと行くぞ、ジジイ」

俺は、魔法力の補助を行ってくれる、地球でいう樫の木に似た木材で作られた杖を持った。そして、ジジイよりも先に家を後にした。この家の立地は非常に素晴らしいものだ。何故なら、ここは村の入り口のすぐ近くに建てられているからだ。地球で例えると、駅の近くに佇んでいるボロアパートのようなものだ。

村の入り口は、脆そうな木で造られており、古色蒼然とした鳥居のような形をしている。内角の部分には大きな蛛網ちゅうもうが張られている。俺たちは、それを潜り、村外に出た。ここから先は、何があってもおかしくない危険地帯だ。

「亮介、お前はまだ未熟だ。小物以外の魔物にはあまり無理してかかるなよ？」

「分かってる。俺だって命は惜しい」

この一年間、名前も知らない赤髪の少女から逃げ続けてきて、俺の口癖はすっかり『命が惜しい』になっていた。よく、近所のガキに臆病リヨースケと言われるが、本当の事なので反論が出来ない。ちなみに、この国での名前の表記は横文字だ。だから、亮介という名前は地域住民からよく珍しい名前と言われる。

話は変わるが、狩りをする予定の山までは村から一キロくらいの道のりを歩く必要がある。それまでにいつも数匹の魔物と出会うのだが、ここら辺の魔物は初心者の旅人向けと言われるほど弱いので、魔法の訓練としては相手にならない魔物ばかりだ。

現に向こうの方から一匹の魔物が迫ってくる。茶色の逆立った剛毛に包まれた、凶暴さはこの周辺でもトップレベルのウルフと呼ばれる魔物だ。ウルフという名前だが、元はただの野良犬だ。

俺はすかさず、杖でウルフの顔を指す。そして、ゆっくりと目を瞑る。

その瞬間、杖の先から細長い竜のような形をした炎が放たれた。それは、轟々と激しい音を立てながら、瞬く間にウルフの身体を包み込んだ。

数十秒もすると、ウルフの身体は完全に灰となった。俺は、そんなウルフの無残な残りカスに一瞥をくると、再び前に向かって歩き始めた。

ちなみに、魔法と呼ばれる技術には詠唱と呼ばれるものが必要だ。だが、魔法を熟練すると詠唱がいらなくなったり、または短くて済んだり、更には魔法の失敗率が少なくなったりすることがある。今俺が放った魔法は初歩的な炎魔法だ。俺がこれを使うのに、詠唱は必要としない。

「お前も基礎的な炎魔法くらいなら詠唱しなくても意思だけで操れるようになったのかい」

「まあ、数ヶ月掛かったけどな」

「全くじゃ。ここまで物覚えの悪い人間は久しぶりじゃ」

ジジイは頭を軽く押さえながら、呆れ果てた目つきで俺の顔を見据えた。俺は少し腹が立ったので、杖の先をしわがれた老人の顔に向けた。すると、彼はギョツと目を見開いて、その後、顔を熟れたトマトのように真っ赤にして怒り始めた。

「こ、こら！ 味方に杖を向ける阿呆が何処にいる！？」

ジジイをからかうと怒号が五月蠅いので、俺は早めに杖を下ろして再び徒歩に意識を向けた。結局、俺はジジイに後頭部を殴られ、ギヤアギヤアと口喧嘩を交わすこととなった。

第三話 兎は肉食

山の麓に辿り着くまで、およそ三匹くらいのウルフを倒した。

魔物は地球で言う害虫と似たような物だ。この世界の生態系にも影響を与えるそうで、いくら倒したとしても咎められることはない。

また、魔物は人を圧倒するくらい強大な力と強靱な肉体を持つ種族もあり、この世界では旅人や腕自慢などの人間たちが栄えているのだ。地球だったら、いくら剣技が巧かろうと、それを活かせる場が少ないので、それらが世界的に栄える事はあまりない。スポーツとして栄える事はあっても、実戦として栄える事は。

一方、この世界は地球でいうミサイルや戦車のような兵器のようなものがなく、戦争は人と人がぶつかり合う中世の戦のような形をしている。いつ、徴兵に駆り出されてもおかしくないので、人々は自分の魔法や剣の腕を磨く事に時間を掛けているのだ。

世界は幾つかの国に分かれていて、それら同士が戦争を行ったり、または内戦が頻発に起きている。俺は今まで、戦争に呼び出されたり参加したりしたことはないが、もしここに留まるとしたら、いつかは自分の力を人殺しのために発揮する時がくるのだろう。

戦争自体は怖いとは思わない。魔法使いは後衛の役割を担うので、剣士よりは明らかに恐怖を感じることも少ないだろう。

しかし、俺は人を殺した経験が一度も無い。だから、人を殺めるのだけは抵抗がある。

ただ、この世界では、戦争で多くの人を殺した者は英雄と称えられる。

『一人を殺せば殺人者だが、百万人を殺せば英雄だ。殺人は数によつて神聖化させられる』とは、ギリシアの哲学者が残した言葉だ。戦争のみの話ではあるが、この恐ろしい言葉がリベルタスでは理に適っているようなのだ。

閑話休題。俺たちは険阻な山道を登り始めた。背の高い草が多く、

それを掻き分けながら進んでいく。

「ジジイ、今日は何を狩るんだ？」

「そうじゃな……最近ここの付近で兎が暴れておるらしい。それを狩るとするか」

ジジイは真剣な顔でそんな話を持ち出してきた。俺は不意打ちをくらったように、少しだけ笑声を漏らしてしまった。

「兎？ そんな小動物がここで暴れてんのか？ 笑い話にしかねえぞ」

「馬鹿にするな。魔物と化した兎は俊敏で常に空腹だ。笑っているうちに奴の胃に収められてしまうぞ」

俺は今までに熊や猪や狐の魔物と戦ってきたが、兎の魔物と互いの死を賭けて戦うのは初めてだ。ましてや、地球ではペットとして可愛がられているあの小動物が、魔物になったとはいえ凶暴になるとは思えない。

俺は少し不服に思いながらも獲物の兎を追って、山のそこら中を歩き回る。

魔物は妙に知能が高く、罠という猪口才な細工は効かないことが多いので、頼りになるのは足跡やマーキングの印、臭いなどだ。某ゲームのように千里眼でも使えれば、魔物探しも楽にはなるのだろうが。

少し足が疲れてきた頃、俺は道中の木の下に兎のものらしき糞を見つけた。丸く固まった粒のようなものが、散らばった玉入れの玉のように落ちている。

本当は嫌だが、俺は少し近づいてその臭いを嗅いだ。すると、鼻を衝く臭いと共に微量のマナの二オイがした。ただ、実際にマナに二オイがあるわけではない。人間の五感以外の感覚のようなもの

がその存在を教えてくれるのだ。

俺はとりあえずジジイにマナの存在を伝える。

「この糞からマナが出てるな、これは魔物の糞と考えていいだろうよ」

「そうか。お前も微量のマナを感じ取れるようにまで成長したんじゃない」

ジジイが珍しく笑顔で俺の顔を見据えてきた。何だか恥ずかしかったので、俺は見るんじゃねえと自分の方から視線を逸らした。

「ここに糞があるということは、足跡もあるだろう。幸い、この糞はまだ古い物じゃなさそうじゃし」

そう言うつと、俺たちは辺りの土を見回して、兎の足跡を探し始めた。すると、ジジイがその木の逆側に奥へと続くいくつもの凹みを発見した。それは四つの点が集まった形をしており、かなり巨大だが兎の足跡だと断定してもよさそうだった。

そこで俺は初めて、笑っていられる余裕を無くした。無意識に眉間に皺が寄っていく。

すると、ジジイが右手で顎を擦りながら言う。

「こいつは運の良い。さて、すぐに足跡を辿るぞ。わしも早く家に帰って休みたい」

その意見には俺も賛成だった。

狩りなんて面倒臭いことは早く終わらせて、飯を食って眠りに就きたい。ただ、あの足跡を見てからでは、多少の不安が脳裏を過ぎよってしまう。

そんな俺の気持ちとは裏腹に、ジジイはさっさと足跡を辿ってい

く。俺は金魚の糞のように、彼の後ろをついていく。

あまり歩かないうちに、俺たちは目線の先に真っ白くて丸い塊のようなものを発見した。二人は木陰から、その塊の様子を眺める。

「あれが兎か……でか過ぎるだろ」

その白い塊は、こちらに背中を向けている兎の巨軀だった。

「確かに。山荒らしと呼ばれるだけはあるの」

山荒らしなんて二つ名、俺は聴いていないぞ。心の中で小さく突っ込んでみる。

俺がよく知っている普通の兎は、人間の手で抱きかかえられるほど小さかった筈だ。しかし、俺たちの視線の先にいる兎は、軽く見積もっただけでも二メートル近くはありそうだった。

そして、俺たちはもう一つ、その兎が今何をやっているのかを知ってしまった。さっきから兎の顔が頻繁に動いていたので気になっ
てはいたが、突然ボールのようなものが、奴の陰になって見えなかった死角から転がってはみ出てきた。

そのボールの正体を悟った瞬間、俺の額から流れてきた一筋の汗が頬をくすぐった。

まさに、捕食というべきか。兎はこの近辺でも特大級の大きさを誇るウルフを食しているようだった。さっきのボールは、悲惨にも身体から離されてしまった犬型魔物の頭だ。それがかなりの大きさだったことから、俺は死角に入って見えない身体も巨大なのだろうと推測したのだ。

俺は少し横に移動して、兎の陰となっている部分を確認してみる。そこには、既に半分以上は骨と化しているウルフの身体があった。案の定、ノーマルのウルフより二倍くらい大きさはあった。しかし、その巨軀も兎の食事スピードからすれば、あともう少しで胃袋

に全部収まってしまうそうだった。普段は草食の兎を肉食に変えてしまふとは、マナとは恐ろしいものだ、と俺は身体を震わせる。

「あれは、まだお前には早いかの。わしに任せておきなさい」

ジジイが俺のところに寄ってきて、声が漏れないように耳打ちをする。わざわざ耳打ちまでするのは、兎に自分たちの存在を覚られないための策だろう。

「ジジイ、お前こそ本当なら隠居しなきゃいけないのに、大丈夫なのかよ」

「それは余計じゃ」

ジジイは軽く俺の頭を小突く。そして、彼は威風堂々と前に進み始めた。どうやら、その時に地面の枝を割ってしまったようで、ウルフを機嫌良く食べている途中だった兎の魔物がジジイの存在に気付いてしまった。俺はその様子を見て、小さく呟いた。恥ずかしいと。

ただ、今はそんなことはどうでもよい。問題は、奇襲に失敗したジジイが、どういう対処をするかだ。

現に兎は自慢の牙を剥き出しにして、まるで脚をばねのように使ってジジイに飛び掛ってきている。

「ジジイ！」

俺は目を見開いて叫ぶ。

「慌てるな。さて……」

そんな俺に対し、ジジイは至って冷静だった。そして、スッと自

分の右手を、宙を駆けている兎の顔に向けた。俺はいよいよだめだ、と自分の目を右手で蔽おほおうとした。

刹那、弾けるような爆音と共に、視界を青白い光が一閃した。ジジイの得意技である雷系の魔法だ。あまりに一瞬の出来事でよく分からなかったが、恐らく兎の身体が青白く輝く雷に打たれたのだろう。次の瞬間には、真っ黒く変色した兎の巨軀がずしりと地面に落下した。

「すげえ……」

俺は目を睜りながら、呟いた。

そつだ。ジジイには奇襲なんて作戦を使わなくても、あの兎一匹程度、普通に倒せるのだ。

ジジイは様々な魔法をバランス良く使える万能系の魔法使いである。だから、一番最初に俺に見せてくれたように炎を操ったり、または雷を操ったりすることができる。

俺は基本的に炎系の魔法しか使えないので、やはりジジイと比べると大きな差があるといえる。

「さあ、亮介。今日は兎の肉でも食べるか」

ジジイはプスプスと焦げている兎の身体をぽんぽんと叩いている。そして、俺に早く飯の準備をするよう促した。

第四話 ジジイの思い

ようやく俺は巨大な兎の皮を剥ぎ終えた。その巨軀には包丁を刺すだけでもそれなりの力を必要とするので、身体から焼け焦げた黒色を完全に無くすまでにはかなりの労力を必要とした。

自分の脳が無意識のうちに危険信号を出している。その証拠に、自分の右腕の筋肉が張っている。俺は左手で右腕を押さえながら、ああと嘆く。

だが、ジジイはそんな俺の苦勞を知らず、暢気に口笛を奏でながら火の準備をしている。俺は、そんな彼の背中を後ろから押してやりたい衝動に駆られたが、齒を必死に食い縛ることで何とか堪えた。あまりジジイに苛々しても仕方が無い。俺は張った右腕に無理をさせながら、兎の肉を片手で持てるくらいの大きさに切り分ける。横目で隣の様子を見ると、ジジイは熟れた手つきでとくに火を点け終えていた。といっても、魔法で火を出せばいいだけなので、なんとも楽な作業である。

俺は切り分けた肉をジジイに手渡す。ジジイは予め持っていた串で肉を突き刺すと、火の横に垂直に刺さっている、先が二股に分かれた二本の棒の上に置いた。

肉が少しずつ焼けていく光景を見ながら、俺は思う。なんて、原始的な調理方法なのだろうか。

しかし、狩りを行う人間にとって、それは赴きのある光景なのかもしれない。

すっかり夜の帳が下り、俺が満天の星空を見上げながら待っていると、肉が焼けたようだった。

ジジイは俺に程よくやけた兎肉を渡してくれた。まるで、兎の魔物がウルフを食していたように、俺もその肉に野生動物よろしくかじり付いた。臭みというか独特のにおいか何かが気になるし、パサパサしてて硬い肉だった。

しかし、俺とジジイはその程度のことなど一向に気にしない性格だった。更に量だけは腐るほどあるので、二人の腹は次第に膨れ上がった。

しかし、元は二メートル近くもあった兎だ。それを骨だけ綺麗に残すことなど不可能に決まっている。

ジジイが少しだけばつの悪そうな表情を浮かべる。

「まだ相当残っているが、どうする？ 干し肉にでもするか」

これだけあれば、当分は食に関しては困らない筈だ。ただ、干し肉にするには時間と労力が必要になる。保存食があれば狩りもしなくて済むが、狩りには魔法の能力を磨く意味も含まれている。

俺は、自分で提案しておいて、そのことを勝手に後悔した。

『はい、私にもください！』

すると何処からか女の人の声が聞こえてきた。勿論、女のような声なのでジジイはありえない。ただ、その鈴を鳴らしたような声には、何処か聞き覚えがあった。

何故だろうか。急に俺の額から滝のような汗が噴き出してくる。

少しずつ近づいてくる足音を聞きながら、俺は悟った。この声の主は俺がここに来る理由を作った、忌々しきあの少女のものだ。

そして、ウェーブの掛かった赤い髪を持った少女が草むらの陰から姿を現した。

余談だが、俺の世界では青とか紫とか緑などの髪色は、染めない限りはありえないものだった。栗の表面のような赤色は稀に見るが、あの少女みたいに鮮血に近い純粋な赤色は見たことがない。しかし、リベルタスではそれらの色が当たり前のように見受けられることができる。青も紫も緑も。

俺がいた地球では、人間の髪色はメラニン色素の含有量で決まる

ものだった。しかし、この世界ではメラニンも糞も無いようだった。話は戻る。少女は満面の笑みで、俺に近寄ってくる。あまりに突然な出来事に、俺は足を動かすことができなかった。

「……っと。お久しぶりだね、亮介君！ 私、一年間も色んな所を回って探したんだよ？ 亮介君も一年間、私に会いたくて仕方が無かったよね？ でも、今日からはこの世界でゆつくりと私たち二人で暮らすことが出来るね！」

台詞でも言うように、少女の口から溢れんばかりの言葉が飛び出てくる。

その様子を、俺の隣からまじまじと眺めていたジジイがあることに気付く。

「お？ お主はあの女の孫じゃないか」

ジジイは少女のことを知っているようだった。俺は殺されかけているので知って当たり前だが、彼と彼女にどのような関係があるのだろうか。

ただ、ジジイの表情が曇っているところ、あまり好ましい関係ではなさそうだ。

しかし、少女の方はジジイの顔に見覚えはないようだ。少しばかり彼の顔を見据えるが、不思議そうに首を傾げている。

「あら？ 私の祖母のことを知ってるの？」

「知ってるも何も、わしをこの世界に引きずり込んだ本人じゃ」

なるほど。俺は納得した。

ジジイは俺に会った当時から日本語を喋ることが出来た。それはつまり、彼が俺と同じく地球からやってきたことを意味している。

まあ、本人から直に聞いた事は無いものの、薄々勘付いてはいた。そういえば、少女はリベルタスの人間のようなのだが、何で日本語を喋れるのだろうか。

だが、あまり深く考えるのはやめ、様々な世界に移動できるから多くの言語に対応できる、と適当な結論でこの一件は終了させた。

少女はジジイの言葉を聞き、酷く驚いたような顔をする。

「まあ、あなたも亮介君と同じく地球からやってきたと？ それはそれは、私の祖母がとんだ粗相を……」

少女が深々と頭を下げて謝罪の言葉を述べる。

「もう、何十年前の話じゃ、今更気にしちゃいらん。それにあいつはわしを守って死んだ。怨んだりなんてしておらんよ。それに亮介、お前こそ決断しなきゃいけないんじゃないか？」

「え……俺……？」

突然ジジイに振られるものなので、俺はどう言葉を発していいものなのか困ってしまった。

ただ、その話題に入った瞬間、少女の笑みがどんよりと曇り始めた。そして、何処か申し訳なさそうな表情で、彼女は俺たちに告げる。

「実は、今すぐにあなたたちを地球に戻すことは出来ないんです」

「……どうということじゃ」

少女が言った言葉は、俺たちにとって衝撃的なものだった。

俺はすぐさまジジイの顔を窺う。言うまでもないが、彼は短気な性格だ。

俺は、ジジイがいきなり怒り出すのではないかと心配したが、そ

れは杞憂に終わった。ジジイは少し悲しげな顔をしただけで、少女に怒声を浴びせることはしなかった。

「さっきも言った通り、わしはお主らのことを怨んではおらん。寧ろ、この世界で生涯を終えるつもりだったから、その言葉を聞いて丁度良いと思っただくらいじゃ」

ジジイはそこまで言うと、一息置いて再び喋り始めた。

「ただ、聞かせてくれ、元の世界に戻すことは出来ないというのはどういうことじゃ？」

その点は俺も気になるところだった。

何故、少女が空間移動の魔法を使えなくなってしまったのか。そこには何らかの理由があるはずだ。帰る帰らない、どちらの判断を下したとしても、俺たちは今回の件では被害者に当たる。当然、知る権利はある筈だ。

少女が少しばかり、ばつの悪そうな顔をする。

数秒ばかり待っていると、やっと少女が口を開いた。

「この世界には規格外のマナを吸収したが故に化物に成長した人間がいます。私はそれを魔王と呼んでいます」

少女の意表を突いた言葉に、俺はゆっくりと首を傾げた。魔王？何のことだろうか？

だが、ジジイには心当たりがあるようだった。

「魔王……確かに、普通なら死んでもおかしくない量のマナを取り入れて、姿形から思想まで何もかも変わってしまった、悲惨な人間がいると聞いたことがある」

「私の能力は、その魔王に奪われてしまいました。彼自信、その力を悪用する気は無いらしいのですが、あなたが元の世界に戻るには魔王から再び力を取り戻す必要があります」

つまり、少女は自分だけが持っている力を魔王と呼ばれる者に奪われてしまい、今は世界と世界を駆けることが出来ないのだという。俺はそこで、当たり前のことを少女に尋ねた。

「じゃあ、魔王を倒せば俺を元の世界に戻してくれるというのか？」
「当たり前じゃない、私の亮介君の頼みなら聞かないわけにはいかないわ」

少女の対応は、ジジイの時のそれとは笑ってしまうくらいの違いがあった。だが、俺は決して表情を弛緩させることなく、逆に睨むような目つきで彼女に再び尋ねた。

「じゃあ、魔王を倒したら、ジジイを元の世界に戻してくれるんだな？」

俺の言葉に、ジジイは少しだけ眉を動かした。

「……亮介？ 何を言っておる？」

「ジジイ、隠し事なんて俺に通用すると思うんじゃねえよ。本当は自分の生まれ育った故郷の土をもう一度踏みたいと考えてるくせに、その思いを簡単に捨てようとしてんじゃねえ」

ハッキリ言って、少女に襲われるのが嫌という理由で、この世界で一年間も暮らしていた俺の言えた言葉ではないことは承知している。

だが、俺はジジイが毎夜も毎夜も元の世界の様子が写った写真を

眺めていたのを目撃していた。だから、彼が心の中では元の世界に帰りたいと考えていることは知っている。

「そうか。お前には隠し事は通用しなかったか。でもな、魔王は噂によると、周辺の魔物を操ることが出来るらしい。そんな力を持っている化物に、ただの人間であるわしらが太刀打ち出来る筈が無い。わしは、何よりも命を犠牲にしてまで、わしのことを守ってくれたあの女のためにも、命を無駄にするわけにはいかんのじゃ」

ジジイの言うことは一理ある。というか、ほぼ正論と言っても良い。人間はマナを吸収すれば吸収するほど、膨大な力を手に入れることができる。単純な話、俺たちがその魔王とやりに挑んだところで、負けるのは明瞭なのだ。

だからこそ、俺はとんでもないことを口走ってしまったのだろう。

「だったら、俺が魔王を倒しに行くよ」

ほとんど感情に任せて放った言葉だった。だが、この言葉は俺の素直な気持ちでもある。

いくら短気で意地の悪いジジイとしても、彼は一年間も俺に寝る場所を与えてくれて、一年間も俺に魔法を教えてくれて、一年間も俺の親のように接してくれた人間だ。

少しばかり恥ずかしいが、俺はそんなジジイに恩返しをしたい。

だが、ジジイは物凄い剣幕で、俺の言葉を否定した。

「無茶を言つな！ お前はまだ、魔法も知識も未熟じゃ。今、魔王の所に行ったところで、お前は一瞬で消し炭にされてしまうぞ！」

「でも……………」

「亮介。お前は元の世界に戻りたいと願うか？」

ジジイが俺の言葉を遮る。

俺はゆっくりと首を振った。

「……………いや、ここはとても良い世界だ。ここでなら、俺も毎日楽しく過ごせていけると思う」

「なら、いいじゃないか。お前はもうわしの子供みたいなものじゃ。いつまでも、あの家でゆっくりと暮らすのが一番じゃ」

ジジイは俺に微笑み掛けてくれた。

俺は何処か腑に落ちない部分もあったが、ジジイの思いに押され、ゆっくりと頷くしかなかった。

俺たちのやり取りを傍から聴いていた少女が、残った肉を手にとった。その瞬間、火に当てていないにも関わらず、肉が一瞬で焦げ目をつくった。

少女は右手で肉を持ち、左手で近くに置いてあった串を手に取り、それで俺の顔を指した。ここが地球だったら、それはマナーの悪い行為だ。ここがリベルタスだから、俺は彼女の無作法に目を瞑ることにした。

「明日まで待ちます。答えが決まったら、ここに来てください。今すぐにでも亮介君に抱きつきたい気分ですが、今日くらいは我慢することにします。さて、私は兎でも食べますか」

少女はそれだけ言うと、右手に持っていた肉に勢い良くかじり付いた。第三者の目線から見て初めて分かったが、なんと野性味を帯びた荒々しい食べ方だった。

ジジイが俺の背中をポンと押す。それに促されるように、俺は家への帰路に就くのだった。

第五話 旅立ち

「亮介、この世界は本当に良い世界か？」

「どうした？ まあ、人と話してると温かい時もあるし、周りが自然ばかりで良い景色も見られるし、とても良い所だと思うぜ」

「じゃあ、魔王の所に行くなんて絶対に言っんじゃないぞ。お前もよく命が惜しいと言っているじゃないか。その通りじゃよ、命は大切なものだから、無茶をしてせつかく親から貰ったものを無駄にしてはならんのじゃよ」

「……そうか」

俺はジジイと二人で並んで歩いていた。普段は俺が先を歩いたり、ジジイが準備に遅い俺を見捨てて先に行ったりしてて、今みたいに横に並んで歩くことなんて滅多になかった。俺はこの光景に、少し新鮮さを感じていた。

「ジジイ、サンキューな」

俺はリベルタスに来て初めて、ジジイに感謝の言葉を述べた。

「お前こそなんじゃ。いきなり気持ち悪い」

ジジイが少し照れたような顔で、俺の頭を小突く。

俺は空を見上げる。紺碧の夜空に浮かぶ星々は、それぞれ幻想的な輝きを放っている。銀粉のように集まって一つの美しさを作るものもあれば、単体で光っている星も存在する。

俺は、その星たちに心を奪われていた。

何で、こんなに綺麗なのだろうか。

思うことはそれだけだった。

「この世界は本当に良い世界だ……」

俺は物思いに耽るように呟く。

この世界で暮らせば、きっと楽しい人生を送ることができる。ジジイと一緒にならば、尚更な気がする。

だけど、やはり間違っている気がする。

ジジイには俺みたいな虚偽の家族ではなく、本当に血の繋がった家族がいるのだ。勿論、この世界ではなく、地球に。

俺はグツと拳を握った。そして、全てを決断した。

*

*

日付が変わった。

外は何も確認することができないくらい暗くなっている。俺は今、トイレの窓から外の様子を眺めている。

俺は寒さに身体を震わせながら、口から漏らすように言葉を発する。

「ここにきて、もう一年になったのか……」

約一年前のある朝。俺はいつも通りに高校に通って、転校生の女の子が来るって聞いて喜んでいた。そして、その転校生を見て俺の心は歓喜のあまりに跳ね上がった。その少女の容姿が、あまりにも俺好みで可愛らしかったからだ。

自分で言うのもなんだが、俺は初対面の相手に対しても普通に話しかけられる性格の人間だった。だから、たまたま横を通りかかったその少女に可愛いね、と言ってしまったばかりに、少女は俺に迫ってきた。

そしたら、少女はいきなり結婚だの恋人だの言い始めたので、俺

は気味悪げに少女から少し遠ざかった。すると、彼女はいきなり包丁を手に持った。うわべだけの笑みを浮かべ、目の奥に鈍い輝きを籠もらせながら。そんな頭の狂った女に出会ったら、もう逃げるしか方法はないだろう。

あのときはまだ、自分の脚力なら少女から逃げられると思っていた。

「そして、俺はここに来てしまったのか」

今思えば、俺はなんて間抜けな異世界トリップをしてしまったのだろう。女の子に追いかけて、そしたら目の前にいきなりトンネルが現れて、勢いを止められずに突っ込んでしまうなんて。恥ずかしくて、穴があつたら入りたい気分が駆られる。

でも、そのお陰で俺はジジイに出会うことができた。少し複雑な気持ちもあるが、そうポジティブに取っていくのが一番だと俺は考えた。

「でも、今日でお別れか」

俺は窓を閉めると、トイレから出て寝室へと向かう。

俺の右手には、一枚の紙が握られている。これは、俺がジジイに宛てて書いた置手紙だ。

やっぱり、俺は魔王を倒すことに決めた。魔王がどんなに強大な力を持っていたとしても。臆せずに戦う決意を決めた。

あの時、俺が覗くように見たジジイの写真。そこには白黒写真で富士山や京都の町並みなどの様々な景色が写っていたが、そのどれにも可愛い女の子と綺麗な女性と若い頃のジジイであろう姿が写っていた。写真に写っている二人の女性は恐らく、ジジイの妻と娘だ。さっきジジイは俺に、お前はわしの子供のようなものだ、と伝えてくれた。でも、それは明らかな嘘だ。結局、俺とジジイは同じ境

遇に立たされてしまっただけの、赤の他人なのだ。

自分の頬を、一筋の液体がくすぐった。この寒い中では、決して汗は掻かない。

「ジジイ……一年間ありがとな」

寝室に入ると、ジジイはベッドの上で気持ちよさそうに寝ていた。俺は、そんなジジイの寝ている枕の横にそっと手紙を置いた。俺はいつの間にか力強く握ってしまったようで、手紙はグシャグシャになっていた。

「……んじゃ、行くわ。じゃあな」

これ以上ここにいても悲しくなるだけだ。俺はさつさと杖や他の必要な道具を纏めると、一年間暮らした思い出の家をあとにした。

夜の道は暗く危ないように思えた。魔物だつてたくさん現れる。

俺は持っていた杖の先から炎を出現させた。まるで、松明のように、俺は杖を灯り代わりにする。

さつきの駆りの時も通った道を、今度は俺一人で歩く。やはり、夜の暗い中で炎を使うのは、魔物に見つかりやすいらしい。さつきからウルフなどの魔物が何度も襲いかかってきたが、俺はその度にそいつらを消し炭にしてくれた。

そして、俺は山の麓に辿り着いた。ここから先は炎が草木に燃え移らないよう、細心の注意を払わなければならない。

俺は片手で草を掻き分けながら、兎がいた場所を辿る。

道を知っていれば着くのは早く、俺はすぐに少女の姿を見つけた。少女は依然として切り株の上に腰をかけていた。俺の姿に気付くと、照明器具のようにパツと笑みを湛えた。

そして、少女は切り株から立ち上がって、こちらに近寄ってきた。

「亮介君！ 随分と早かったんだね、それじゃ答えを聞かせてもらおうか」

少女はさっそく本題に入る。だが、俺は答えを決めてきたので、返答には躊躇しない。

「……俺は、魔王を倒して君の力を取り戻させる」

「そう。それが、あなたの考えたというなら、私はあなたの考えについていくまでだわ。今回は私に落ち度があるわけだし、私もあなたについていくわ」

俺は驚愕のあまり、目を見開いた。そして、莞爾^{かんじ}として笑っている少女の顔を見据えた。

「お前、意外と良い奴なんだな」

俺が少女に向かってそう言うと、彼女は爆発したかのようにいきなり顔を真っ赤に染めた。

俺はそんな彼女の恥ずかしがる表情を見て、不覚ながらも可愛いと思った。当たり前だが、声に出すような馬鹿なことはいしない。俺はどちらかといえば、学習するタイプの人間だ。

「……えええ、と。私の名前はセレナ、セレナ・テムプス。よろしくね、亮介君」

「ああ、よろしくな、セレナ」

俺はセレナに握手しようと手を差し伸べようとしたところで、思い留まって手を引っ込める。ここでまた誤解されると面倒くさいことになると思ったからだ。

しかし、俺が手を引っ込める間に、セレナに手を握られた——も

とい掴まれた。俺はあまりの速さにビクツと身を震わせた。

セレナは思い出したように、口を開く。その瞬間、彼女の目から輝きがスウと退いていくのが分かった。また同時に、背中に悪寒のようなものを感じた。

「あ、そうそう。言い忘れてたけど、あまり私を嫉妬させるようなことはしないでね」

セレナはそこまで言うと、一息置く。そして、鉛のような瞳でこちらを見据えながら、最後の一言を発する。

「……殺しちゃうかもしれないから」

「……………え？」

やはりセレナは暗器の達人なのだろう。彼女の、俺の手を握っている方とは逆の手には、いつの間にか鈍い光を発している料理用具が握られていた。俺の顔が顔面蒼白となった。鏡を見なくても分かる。

俺の脳が身体全体に危険信号を送っていた。早く逃げろ、死ぬぞ。まるで脳が叫んでいるかのようだった。

そこからの俺の行動は速い。

俺はセレナの手を乱暴に振り払う。彼女がキャツ、と可愛らしい声を上げる。俺はお構いなしに、山の奥へ逃げるように走り始めた。

「え？ 何処にいくの、亮介君？ 何で、何でまた私から逃げるのかな？」

「げっ！？ 追いかけてきた、ヤバイ！」

さっきの良い奴発言。それは撤回させてもらうことにする。

セレナ・テムプス。奴は一年前と変わりなく、包丁を平気で振り

回す頭の狂った少女だ。

結局、彼女と打ち解ける可能性は、儚く塵と化した。俺は目に涙を浮かべながら、輝きの無い笑みを浮かべたヤンデレ少女から只管逃げるのだった。

第六話 依頼受理

一年前の時より、俺は運動能力が向上していたらしい。必死の逃走の末に、何とかセレナを撒くことに成功したようだ。

杖やポーチなど多くの荷物を持っていたにも関わらず、あのセレナに追い付かれなかったのはやはり常日頃の訓練の賜物だろう。

どうやら、俺は闇雲に走っているうちに山を越えてしまったようだ。気付くと、見たことのない街の入り口の前に立っていた。

今まで、自分の村の周辺しか見たことのなかった俺にとって、この辺りは未知の場所だった。地理なんて分かるわけもないし、ここらで見る魔物も村近辺とは姿形が異なるものばかりだ。

とはいえ、もう一度山に戻るのも気が引ける。もしかしたら、セレナに遭遇してしまうかもしれない。

俺は困り果てたように髪の毛を掻き^{むし}った。

「とりあえず、宿を探してみるか」

とりあえず、街の中に入った方が良さだろう。ここら辺は魔物が多くて危険だ。

この街は何メートルもの高さはあろう外壁が堂々と立っており、その周りは更に濠も存在している。これなら、飛行系の魔物ではない限り、魔物が街の中に入ってくることもない筈だ。

俺の村には、有刺鉄線が服に着いた糸屑程度にしか張られていない木製の柵しかなかった。更に、その柵の背も低いので、ウルフぐらいの跳躍力のある魔物なら簡単に侵入できる。

ただ、前にも言った通り魔物は普通の動物よりも知能が備わっている。無益に人の領域を侵す真似はしない。極稀に、異常なまでに興奮した魔物の群れが村や街を襲ってくるらしい。俺はその境遇には対面したことないが、かなりの被害が出るらしい。

俺は門を潜るべく、見張りの兵士に国民証明書を提示した。村と呼ばれる区域に入るには必要無いが、街のように大きな場所となると自分が国民であると証明するための許可証が要る。また、他国の旅人の場合は、母国の承認の入った許可証が要る。

「それでは、中にどうぞ」
「どうも」

証明書を返してもらい、俺は軽く感謝の言葉を述べると、さつさと門を潜って街の中に入った。

俺はいよいよ露にされた街の風景を眺め、そして仰天した。それは、村と街の圧倒的な違い。生活住居、商店、活気。全てに於いて、俺が住んでいた村とは月とスッポンにも近い差をつけられている。

周りの建物は煉瓦などで造られたものが多く、殆どが木で組み立てられている村の家とは別格だ。そして、今は良い子は寝なければならぬ深夜にも関わらず、行く先々は灯りで煌々と照らされておりそこそこ明るい。

更に旅人なのか、剣や杖を持った大柄な男たちがそこらを闊歩している。どうやら、ここは旅人の街としても栄えているようだ。

「金は少ないし……安い場所探さないと駄目だな」

家を勝手に抜け出てきた身なので、言うまでもなく有り金は少ない。街近郊の魔物を狩って毛皮でも売れば、それなりに金は入ってくるのだろうが、如何せんさつきまでセレナと恐怖の鬼ごっこをやっていたので、外に出たいとは思わなかった。

俺は街の中を歩き回り、只管破屋でもいいので安い宿を探した。そうでもしないと、俺の持っている金じゃ屋根のある場所では泊まれそうにない。だからといって、野宿をするほどの準備は生憎して

いない。

「仕方が無い……ギルドや働き場のような場所を探すか」

この世界は魔物がうろついているため、何らかの事故や事件が起きることも少なくない。また、魔物の素材は価値があり、それを剥ぎ取れば金になる。

そのため、魔物を討伐や狩猟してほしいと願う人はこの世界にたくさんいる。それらの願いが依頼となって集まるのがギルドだ。

そのギルドには、多くの旅人やそれを専門とした強者たちがいる。中には二つ名をつけられたりして、注目される人間もいるし、影でこそこそと依頼をこなす猛者もいる。どっちにしろ、ギルドでは強い人間がほとんど金を稼げる仕組みになっているのだ。

多くの仕事は魔物の討伐なので、魔法の腕を磨くにも良い修行にもなるだろうし、ちゃんと依頼を遂行すれば金も稼ぐことができる。いつか、旅人として修行することになったら、行こうと思っている場所でもあったし、俺にとってギルドという存在は非常に丁度良い場所だ。

「それじゃ、ギルドに向かうとするか」

俺は偶然自分の横に立てられていた街の地図を睨むように見て、ギルトと書かれた部分を発見すると、さっそく向かうことにした。

また、道の端に佇む広告看板にもギルド関連の内容は多いようだ。ちなみに、俺が見た看板にはギルド直線五〇〇メートルの文字があった。そこまで離れていないようなので、俺は道の真ん中を疾走する。

それから一、二分で、俺はギルドの入り口に辿り着いた。この街のギルドは地下にあるようで、そのギルドが所在する建物の一角に地下へと繋がる階段があった。妙に傾斜が激しいので、滑り落ちな

いように気をつけながら、俺はその階段をゆっくり下っていく。

「すげえ……ここがギルドか」

入り口を潜ると、まだ深夜なのにも関わらずギルドは多くの人で賑わっていた。

依頼を受理し、委任する綺麗な受付嬢さん。また、鼻の下を伸ばしながら依頼を眺める振りをして受付嬢の顔を見つめているむさい男たち。更には報酬が少ないと騒ぎ立てるチンピラなどもいた。

俺は入り口の前で茫然と佇んでいた。まるで、飲み会に行ったのはいいものの、周りのノリについていけず孤立している気弱な人間のように。

「はあい、ハンターたちのギルド、ケントウム支部へようこそ。このギルドに来るのは初めてですか？」

そんな俺に、ギルドのスタッフと思われる女性が話し掛けてきた。突然のことに、俺は動揺する。どうやら、一年間も自分の目を惹くような美しい女性（セレナは除く）を見ていなかったたので、少し女性に対する免疫というのが薄れてしまっていたようだ。

「は、はあ……ここに来るのは初めてです」

俺は少し低姿勢になりながら返事をする。スタッフの女性はふふと微笑みをこちらに向けると、自分の後ろをついてくるよう伝えてくれた。

「さあ、初めての方にはギルドについて説明を受けてもらいます。まずは、ギルドの概要について説明します。ギルドとは、人探しや護衛、魔物の討伐などの依頼を受理することが出来る施設の総称で

す。ここで様々な依頼をこなして名を上げるのもよし、またはたくさん依頼を遂行してお金をがっぽり稼ぐのもよしです」

「あ、あの……ギルドのことは大抵知ってるんで、説明はいいです」

俺はこれから長くなるであろう女性の説明をぎこちない笑顔で遠慮した。すると、女性の口元から僅かにチツという音が聞こえると共に、彼女は俺を置いて何処かへ消えてしまった。

「舌打ちするなら聞こえないようにしてくれよ……」

多少、舌打ちの件は気になったが、気にしたところでどうにもならない。俺はさっさと受付に行つて依頼を受けることにした。

受付には数人の若い女性たちがおり、男ばかりのハンターたちに様々な依頼を紹介していた。俺もそこから空いているところを探して、依頼を紹介してくれるよう頼んだ。

「ここはハンターたちのギルド、ケントウム支部です。何か依頼をお探ですか？」

「はい。なるべく難易度の低い魔物討伐の依頼をお願いします」

「承知いたしました。少々お待ちください」

女性は受付台の下から、膨大な量の書類を取り出した。ただでさえ台の上には宝の地図のように黄ばんでいる書類が堆く積んであるのだ。それを上書きするように、また書類のタワーを出すものなので、俺は無意識に身体を仰け反らせていた。

受付嬢のお姉さんは、その中から数枚を選んで俺に見せてくれた。量は何百にも及ぶ筈なのに、そこから一桁まで絞るとは、只者ではないな、と俺は思った。

「まずは、この街の周辺に群れを作っているウルフの討伐依頼です」

「ウルフか……流石に見飽きたな」

俺はゆっくりと頭^{かぶり}を振る。

「次の依頼は？」

「次の依頼は、街から北西の位置にある洞窟に住み着くりザードマンの討伐依頼です」

女性はずっと固まった営業スマイルのまま、その依頼を紹介してくれた。

リザードマンは、蜥蜴と人間を足して二で割ったような姿を持っている魔物だ。攻撃的な性格のため、下手に刺激すると怒り狂ってしまうので厄介でもある。まだ出会った事はないが、ジジイから危険な生き物だと教えられたことがある。ギルド中級者なら雑魚に値する魔物なのだが、初心者がリザードマンと戦うのは相当辛いらしい。

だが、俺はその依頼に興味を持った。

「その依頼について詳しく教えてください」

俺は受付嬢のお姉さんに概要を尋ねる。

「この依頼は洞窟を縄張りにするリザードマンを一体討伐する依頼です。手負いのため、難易度は低めです。依頼主は、ここに表記されている住所にいるロマーネさんです。報酬は五五〇〇オーラム、契約金は一〇〇オーラムです」

「あ、じゃあそれでお願います」

俺はリザードマン討伐の依頼を受理する事に決めた。

ちなみに、お姉さんが言っていたオーラムとは、この世界で流通

されている通貨の名前だ。基本的にはこの世界には紙幣というものは存在せず、全てが硬貨なため大金を持っている人はとても重く感じるそうだ。

「まず、依頼主のもとに向かって更に詳しい説明を聞いてください。そして、この契約書をお渡し致しますので、仕事終了後に依頼主から印をもらってください。そして、印を貰った契約書を見せてくれれば、依頼は無事に遂行されたと認められます。それでは、契約金の一〇〇オーラムをお支払いください」

「分かりました」

俺はそういつて、ボロボロの布で出来た財布（というかただの囊^{ふくろ}）から一〇〇オーラムを取り出し、それをお姉さんに渡した。代わりに俺は彼女から一枚の契約書を貰った。

「それでは、安全には気をつけて。いつてらっしゃいませ」

受付嬢のお姉さんは最後まで決して営業スマイルを崩すことなく、俺に手を振ってくれた。なかなか親近感の湧く場所だな、と俺は思った。舌打ちの件なんかとつくに忘れた。

俺は流石に手を振り返すことはできず、軽く会釈だけした。そして、契約書無くさないように折り畳んで背囊の中にしまう。

まずは依頼主のもとに向かおう。俺は初めての依頼に胸を躍らせながら、ギルドを後にした。

第七話 邂逅

とはいえ、今は良い子が羊を数え終えてぐっすり眠る深夜だ。依頼主も今頃、鼻ちようちゃんを膨らませながらいびきを掻いているだろう。流石に迷惑が掛かるだろうし、泥棒に間違われても困る。

考慮の末、俺は明け方に動きを開始することにした。それまでは、荷物もまだ少ないので宿はとりあえず諦めて、そこらの公園で休憩を取りたいと思う。

そして、俺はすぐさまギルドに一番近い公園に足を運んだ。公園といっても、本当はただの空き地みたいな場所だ。この世界にはアトラクションとか遊具という言葉は存在しないようだ。

何度も話したが、文化レベルは地球より低いので、テレビもなければパソコンもない。情報を伝えるのは、新聞や掲示板に限られる。ただ、最近では電波を利用した技術が開発されようとしているらしい。近い将来、この世界にもラジオに近い存在が出来るだろう。

話は大きく逸れたが、俺は公園の一角にベンチを発見すると、ラッキーと呟いてその上に横たわった。今までずっと走ってたり立っていたりしていたので、そろそろ自分の脚が悲鳴を上げていた頃だ。ちゃんと休ませてあげないと、いつか筋肉が音を立てて壊れてしまいそうだ。

「ふあああああつ！ 疲れた……」

俺は盛大な欠伸をかましながら、夜の星空を仰いだ。俺はそこでふと気付く。この世界は、地球と違って都会でも星がよく見えるのだ。勿論、ここには灯りがあるから、そこに関しては何にも無い村の方がよく見える。

しかし、あくまでもここはリベルタスだ。オリオン座とか夏の大三角形とか地球と同じ星座を見ることはできない。

それでも、満天の星空を眺めているだけで自分の心が澄んでいく気がした。夜の帳に無数に張り付く銀粉のようなそれは、俺が再びこの世界も悪くないと感慨に耽る要因にもなった。

明日は早い。そろそろ寝るか。

そう思い、目をゆっくりと閉ざそうとした時だった。

「星は綺麗ですか？ 旅人さん」

突然、何処からか女性の声がした。俺はパツと目を開く。

自分の視界の先には美しい女性の顔があった。どうやら、俺の顔を上から眺めているようだった。

俺は上半身を起こし、その女性の顔を確認する。無論、それは全く見覚えの無い女性のそれだった。

夜空と同じ紺色の髪の毛を肩に触れるか否かの長さまで伸ばしていて、目がちよつと大きいくらいことしか、この暗さでは確認することができない。ただ、それだけでもその女性は目の覚めるような美人だということが分かった。現に、俺の眠気がいつの間にか何処かへ消えてしまった。

それにしても、彼女は誰なのだろうか。俺は軽く眉間に皺を寄せた。この深夜帯に女性が一人でいるなんて不自然すぎる。もしかしたら、彼女は俺の財布を狙っているのかもしれない。

俺が考え倦んでいると、女性がいきなり微笑みだした。まるで、月光のような妖美な笑顔だった。

そして、女性が俺に言う。

「いきなり、すみません。あまりに気持ち良さそうに星を見ていたものだから、ついつい声を掛けてしまいました」

「それくらい、別にいいけど……」

俺は後ろ髪を掻きながら、返事をする。それから女性は何も

言おうとせず、俺たちの間に急な沈黙が生まれる。

それでも一分くらい我慢していると、女性の方から沈黙を破ってくれた。

「ごめんなさい。いきなり声を掛けておいて、こんな沈黙を作ってしまったって……」

女性が申し訳なさそうな顔で謝る。俺は神妙な面持ちになりながら、ベンチの横の部分を空ける。

「だから、別にいいよ。星が綺麗なら、アンタもここに座って眺めてればいい」

「そうですか、ありがとうございます」

女性が感謝の言葉を述べながら、俺の隣に座った。

俺は再び星空を仰いだ。今度は座りながらなので、多少首が痛くなることは覚悟した。

すると、俺たちの間に二度目の沈黙が生まれた。でも、今回は二人とも星を眺めているだけなので、不自然さというか妙な気まずさはなかった。

「うわあ、本当に綺麗です……」

俺はちらりと横に視線を移す。女性の黒い瞳には、星々の青白い光が反射していた。それほど、少女の瞳は水面みなものように透き通っている。

よく見ると、彼女は意外と小柄だった。だが、顔付きは非常に大人っぽく、何処かの旅館の若女将のようにも見える。

突然、彼女が悲しげな表情を湛えた。見ているこっちが切なくなるような気がした。

そして、ゆつくりとその唇が開かれる。

「……………何だか寂しいです」

「……………何がだ？」

俺は彼女にその言葉の意味を尋ねていた。特に興味があったわけではないが、無意識に自分の口が動いていた。

彼女は首だけを俺の方に向けた。そして、うわべだけの笑顔を漏らした。きっと、彼女は無理をしているに違いない。嫌な過去でも思い出してしまったのだろうか、と俺は思った。

「たくさん星が浮いているのに、足りないんです。ここ、私の故郷とは離れた場所なんで……………」

彼女は郷愁に駆られていたようだ。どうやら、彼女はこの街から見える星空じゃ満足できないらしい。

「そうか……………でも、それは俺も一緒だ」

俺は彼女の言葉に心から共感できた。

俺は故郷も第二の故郷も離れて、ここにいる。だから、とても怖い。何が怖いって、どんどん新しい土地に愛着を湧かして、昔の自分を失っていくような感覚が怖い。

ふと、少女が口を開く。

「あなたは旅人ですよね？ 何処の町からいらっしゃったんですか？」

「プリーマ村っていう田舎からだ」

俺が淡々とした口調で答えると、女性はそうですか……………、と物悲

しげに呟いた。

俺は流石に気になったので、その女性に故郷のことを訪ねた。

「アンタの故郷は何処なんだ？」

彼女の口が一回開きかけたものの、声を出そうとしたところで止まった。

俺と彼女が見つめ合う状態が一分程続いた。そして、彼女はついに答えてくれた。

「私の故郷は……とにかく離れたところです。言葉も違って、文化も生活環境も違って、見える星すら違う所です」

「そうか、それでも言葉が違うというのは珍しいな。ここは古代言語を除いたら、基本的には世界共通の言語が使われているはずなのだが……。それに、見える星が違う……見える星が違う？」

『見える星が違う』という言葉を一度言った後、俺は少し違和感というかデジャブを感じた。そして、もう一度語尾を上げながら同じ言葉を呟く。

俺は勢いのままに彼女に質問を投げかけていた。

「アンタ、見える星が違うってどういうことだ！？ 詳しく聞かせてくれ！」

急に俺が声を張り上げるものなので、彼女は小動物のようにびくりと肩を震わせた。

「え！ あ、はい……。私の故郷には色々な星座がありました。射手座というものとか蟹座というものとかオリオン座というものとか、それはそれは様々な種類のものがありました。でも、ここから見え

る星座は私の故郷から見える星座とはみんな形が違うんです」

俺は目を見開きながら、驚愕のあまり絶句した。

彼女が挙げた星座の名前は、全て地球から見える星座の名前と一緒だった。

つまり、彼女の故郷は俺と同様地球ということだ。まさか、嘘だろ、と俺は呟く。

「アンタ……地球からやってきたのか？」

「……え？ 何で、地球のことを……」

少女の目の色が変わった。そして、彼女はゆっくりと左手の人差し指をこちらに向けた。

「まさか、あなたも……！？」

俺たちは互いの目を見つめながら、言葉を失う破目となった。

これは運の良いことなのか、それとも運の悪いことなのか。どちらにしる奇跡と呼んでもおかしくない、二人の地球人が邂逅した瞬間だった。

第八話 同行

「それじゃあ、あなたも次元の旅人によってここへ……？」

女性は真っ直ぐと俺の目を見据えながら尋ねた。

俺は次元の旅人というものがどういうものなのかは知らない。だが、言葉の意味から察するに恐らくセレナのことを指しているのだろう。

俺は夜空に浮かぶ月（といってもここはリベルタスなので、地球から見える月とは別物である）を眺めながら、考え始める。

現在、セレナまたはその一族によってこの世界に連れてこられたのは、俺とジジイと彼女ということが分かっている。一年という短期間で、俺は二人の地球人に会っているわけだ。もしかしたら、他にも地球からここに来た人間がいるかもしれない。

これは非常に喜ばしい事実だ。勿論、多くの地球人が集まれば集まるほど、魔王を征伐しようとする脅威は増えるわけだ。

俺はひとまず頷く。

「そうだ。俺はセレナという女に追いかけられている途中、勢いでワープトンネルに入ってしまった。もう一年前の話になる」

「一年前ですか……。私は三年前に、大柄の男の人によってここへ連れてこられました。でも、私がここに運ばれた理由は今でも分かっていません。どうやら、次元の旅人一族は、二年前にそのセレナという少女を残して滅亡してしまったそうです」

女性は困り果てた表情で言った。

俺はその情報のことを一年前にもジジイから聞かされていたので知っていた。しかし、何故滅亡したのか、という原因はジジイにも分からないようだ。故に俺も分からない。

「私は、少しでも早く元の世界に戻りたいです。もし、セレナという少女の居場所を知っているなら、この私に教えてくれませんか？」

女性は決して揺れない視線を俺に向けたまま、更に少しずつ顔を近づけてくる。その間は数センチ。ちよつとでも顔を動かせば俺と彼女の唇が重なってしまいそうな距離だ。どのようなシャンプーで洗髪しているのだろうか、甘い柑橘系の匂いが俺の鼻孔をくすぐる。俺は顔を真つ赤にしながらも、セレナに会っても意味は無い、と首をゆつくりと横に振った。彼女は驚いたように目を睜り、その理由を尋ねた。

「セレナは魔王という存在に、世界と世界を駆ける力を奪われてしまったそうだ。その魔王を倒さなければ、彼女に力が戻ってくることはない」

「魔王……マナを過剰摂取した人間の末路ですか。ハッキリ言って人間の力じゃ勝てる気がしないです」

「でも、俺は魔王を倒すため、こうして旅に出ているんだ」

俺が大事そうに檜に似た木材を彫って造られた杖を両手で持つ。彼女はそんな俺の言葉を聞いて、更に驚いたような表情を浮かべた。

「魔王を……倒す？ あなたは、本当にそんなことを考えているのですか？」

「勿論だ。これは、言葉も地理も分からない俺を一年間も養ってくれた人に対する恩返しでもあるんだ。だから、俺は今は弱くても、除々に魔法の力を磨いていつて、最終的には魔王を倒せるようになるまで頑張るつもりだ」

「言葉なら、いくらでも言えます。ただ、私はあなたの思いを行動で見せてほしいのです」

まるで粉が散らばったように見える星空の下、彼女の表情が一瞬だけ輝いたような気がした。俺はその変化に気付き、顔を強張らせる。

そして、彼女は腰に携えていた鞘から剣を抜いた。それは、僅かな反りが禍々しさを放つ、日本刀のような刀だった。生憎俺は刀には詳しくないので、それが日本刀なのか違う刀なのか見分けがつかない。

ただ、その刀がどっちであろうが、彼女は素早い動きと冷静な洞察力を必要とする剣士という職業であるようだ。

彼女は刀の銚きつねを俺に向けた。俺は身体を仰け反らせながら、寄り目になって刀を見つめる。

視線を女性に戻すと、彼女の口角の左側だけが不気味に上がった。彼女はもうさつきまでの大人しい女性ではない。彼女の目つきは、人も魔物も一刀両断する剣士のそれだった。

「私もその旅に同行させてください。剣士としての技量はまだまだ未熟ですが、あなたの話を聞いて、私も魔王を倒したいという気持ちが生えました」

彼女の言葉は意外なものだった。俺を目を丸くさせる。

「それは本当か？ もし、本当なら歓迎だ。同じ地球人だから信頼出来るし、人数は多い方が何かと困ることも少ないだろう」

俺がサムズアップを見せると、彼女は感謝のあまりか辞儀をした。

「そうですか、ありがとうございます。私の名前は夕暮鈴刃ゆづくれすずはと申します。あなたの名前を聞かせてもらってもいいですか？」

「俺の名前は秋田亮介だ。呼ぶときは何でも構わない。これからよ

ろしくな」

仲間が増えた事に安心感を得られたのか、俺は満面の笑顔を湛えた。

すると、鈴刃は右手で軽く口元を押さえながら静かに笑みを浮かべた。やはり同い年くらいに見えるのに、彼女の仕草は妙に大人っぽい。本当に蠱惑こわくされてしまいそうな魅力を、彼女は持っている。まあ、彼女は人を惑わすような女ではないと、俺は信じているのだが。

「そういえば、ギルドでリザードマンの討伐依頼を頼まれたんだ。一緒に行くか？」

「当たり前です。まずは、私の刀の切れ味を、あなたに知ってもらいたいと思います」

鈴刃は刀を水平にして、その刃を満足そうに眺めると、スツと鞘に戻した。

俺たちは朝の六時にこの場所で待ち合わせすることに決め、ひとまず準備のために解散した。

第九話 依頼主

日は昇り、街が起き始める。辺りには鶏鳴が響き、親切にも夜明けをお知らせしている。

昨日の夜ですら、この街は多くの人がひしめいてたにも関わらず、今はその数倍にも及ぶ人たちが更なる活気を見せていた。

俺はさっきまで空き地のベンチに横たわって、数時間ではあったが睡眠を取っていた。何も無ければそのまま一日中は寝てしまいそうだったが、待ち合わせ時間になったと同時に、鈴刃が優しく起こしてくれた。

どうやら俺は寝ぼけていたようで、欠伸をすると同時に美少女が視界に映ったものなので、驚いてベンチから転げ落ちそうになった。鈴刃は大人っぽい微笑みの中に、僅かながら純真無垢たる子供のような表情を垣間見せている。

「さあ、今日は初依頼の日ですね。少しでも早く魔王の力に対抗出来るように、頑張ってくださいましょう」

鈴刃は自分の胸の前でパンと手を叩きながら言った。

「そうだな。獲物はどうやら手負いのようだが、決して油断せずに行こう。ただ、俺はリザードマンについての知識に乏しい。何か、その魔物について情報などは知ってるか？」

俺は、まだ生では見たことの無い魔物の情報を得るため鈴刃に訊いてみた。鈴刃は視線を少しばかり斜め上に向けた。そして、頭の中で話す言葉の整理がついたのか、右手の人差し指を立てながら、リザードマンについての情報を話し始めた。

「リザードマンは知つての通り、緑色の皮膚を持った蜥蜴型の魔物です。元から攻撃力が高いうえ、知性も備わっているので、旅人から奪った剣や盾などを使用するときがあります。また、緑色の鱗は数多の魔法を弾き、数多の剣を折るほど硬いと言われています。そのため、弱点である心臓の周辺を狙って攻撃するしかないようです。といつても、リザードマンはレベルの低い魔法や剣くらいしか防げないので心配は無用です。今は、ちょっとした伝承での話なので」

まるで台詞でも言うかのように、滑らかな口調で鈴刃は語った。しかし、ここに来てから三年しか経たないにも関わらず、リザードマンについての伝承を知ってるなんて彼女は物知りだな、と俺は感心の声を漏らす。

俺は感謝の笑みを鈴刃に向ける。

「そうか、詳しい説明ありがとな」

「いえ、感謝されるほどのことはしてませんよ」

鈴刃は笑みを返してくれた。やはり、彼女は男なら誰もが振り向くような美貌を持っている。絶世の美女と言うほどではないが、俺みたいな平凡な容姿を持つ人間には勿体無いくらいだ。

とりあえずギルドの中では気をつけることにしよう。もともとむさ苦しい男ばかりが集まっているので、男女二人組みなんかで行動なんかしたら周りから嫉妬の目を向けられてしまう。運が悪ければ、汗臭い筋肉野郎にからまれる可能性も否めない。

「それより、なるべく早く依頼主さんのもとへ向かいましょう」

俺は鈴刃の言葉に頷く。そして、契約書に記載されている住所へ足を進め始める。

実際、距離的にはそこまで離れていなかったので、依頼主の家と

やらにはすぐに着いた。俺は早速、その家の扉をノックしてみる。

中からハイと男の人の返事が聞こえた。しばらく待つと扉が開き、痩せこけた体格の初老の男性が現れた。俺は右手に持っていた契約書を、警察手帳を見せるかのように提示する。

男性は胸のポケットから眼鏡を取り出して掛けると、じつくりと書類の内容を確かめた。すると酷く驚いたような表情を見せた。自分の依頼を取り扱ってくれるとは思いもしなかったのだろうか。

男性は俺たちを家の中に入れてくれた。

そして男性に促されるまま、俺たちは黒い革製のソファアに腰を掛けた。

「あなた達が依頼を受けてくれた人ですか、今回は本当にありがとうございます。すぐにお茶をお出ししますから、ゆっくり寛いでください」

そう言って男性は奥の部屋に入った。寛げと言われても何もすることがないので、俺たちは小学校なら先生がべた褒めしてくれるほどの良い姿勢で、男性が戻るのを待つことにした。

男性がお茶が置かれたトレイを持って戻ってきて俺たちの姿を見るなり、目はボールのように丸くなり口はあんぐりと大きく開かれた。

「そんな緊張はしなくても大丈夫ですよ。ささ、どうぞ」

男性は気の抜けるような笑みを湛えながら、前にあるテーブルにお茶を置いた。

「さて、本題に入らせてもらいます」

男性が俺たちとは逆側のソファアに腰を下ろす。

「街から北西にとある洞窟があるのですが、その近くに私が所有する畑があるのです。しかし、リザードマンが洞窟に住み着いてしまったせいで、迂闊に畑に近寄ることも出来なくなってしまう、また、畑を無残にも荒らされてしまいました。前に一度、この依頼を別のハンターさんに頼んだのですが、それから消息が絶たれてしまいました……。私が意を決してリザードマンを確認しにいくと、奴の右腕が切断されていました。しかし、奴は怒りのあまり、かなり暴走していました。今私がここにいても不思議な気分ですよ」

ハアと溜息を漏らしながら男性が話す。そんなこと聞いてないぞ、と俺は目を見開いた。

「それで、暴れ狂ったリザードマンを止めるべく、俺たちに洞窟へ向かってほしいということですね？」

鈴刃が確認するように言う。男性はゆっくりと頷いた。

「はい、その通りです。報酬はそれなりに弾んだつもりなので、よろしく願います。ただ、決して無茶だけはしないでください」

俺と鈴刃は出されたお茶を飲み干すと、早速洞窟へ行く準備を始めた。依頼主のおじさんは何度も頭を下げながら、俺たちを見送ってくれた。

そして、俺は街の出入り口の門がある北へ向かった。目的の洞窟へ行くには、その門を潜り抜けてから少し歩くだけでいいので、障害になるような山や森などはない。

「リザードマンの討伐なんて、緊張しますね」

「まあ、俺も初めてだからな。少しは緊張している」

街の大通りを歩きながら、俺と鈴刃は獲物のリザードマンについて話す。まだ手負いだからマシなもの、かなり凶暴で厄介な魔物らしい。どうも爬虫類というドラゴンや恐竜を想像してしまう俺には、リザードマンという敵は恐怖の対象でもある。

空はまだ日が昇ったばかりで青く澄んでおり、太陽は燦爛と照っている。俺はその輝く太陽を、手で軽く目を覆いながら仰いだ。

そして、それと同時に俺の腹の虫が、我慢の限界なのかおぞましく悲鳴を上げた。

「……まだご飯を食べていなかったのですか？」

「完全に忘れてた……」

俺が腹を擦りながら言うと、鈴刃は呆れたような顔をした。だが、すぐに笑みを浮かべて、俺にご飯を食べにいこうと提案をしてくれた。

「すまないな」

「いいですよ。腹が減っては戦が出来ぬとはよく言う諺でしょう？
丁度、良い店を知ってますから、付いてきてください」

すると鈴刃が俺の前に出て、その店へと誘導するために歩き出した。その後ろを、自分は情けないなと心の中で思いながら、ぎこちない笑顔を浮かべてついていくのだった。

第十話 赤髪タトゥー

鈴刃の案内で着いた先は、アンティークな外装の店だった。とはいえ、地球とリベルタスでは文化レベルが違うので、あくまでも地球目線から見てそう思えるだけだ。

俺がその店の前に立つと、自分の顔が青褪めていくのが感じ取れた。理由は至極単純、金が足りなさそうだからだ。その外装を見ても、そこは非常に高そうな店に見える。破屋のような宿屋しか探せないような俺が、こんな店で物を食えるわけがない。

しかし、鈴刃が俺の心情を無視するかのよう、さっさと店の中に入ってしまった。ここでずっと待ってるわけにもいけないので、俺はしょうがなく中に入る事にする。

「いらつしゃいませ……ああ、鈴刃ちゃん」

「こんにちは、アレンさん。朝早くからご苦労様です」

中に入ると、何と俺や鈴刃と同じくらいの年であろう少年がいた。その風貌を見た瞬間、俺の肩が恐怖に戦慄わなないた。

一番特徴的なのは赤く逆立った髪型だ。どんな整髪料でセットしたのかは分からないが、まるで触れれば肌が切れてしまいそうなほど、髪の毛一本一本がピンと直立していた。

更には耳に髑髏のピアス、そして腕には矢の形をしたタトゥーが見られた。

顔だけに関しては、気弱で軟弱そうな顔つきをしているにも関わらず、その格好が常軌を逸した厳つさを放っている。

当たり前のようだが、俺は絶句を余儀なくされた。何が良くてあんな恰好をしているのか、俺には到底理解できない。確かに、俺は飾らな過ぎかもしれない。服装は動きやすい、汚い布の服。髪の毛はボサボサ、拳句の果てには長い期間に亘って伸ばしてきた無精髭

だ。

これは最早、飾る飾らないではない。不潔だ、と俺はひくひくと口を引き攣らせながら呟いた。

俺が少し俯きながら落ち込んでいると、少年が鈴刃の後ろにいた俺の存在に気づいた。

「あ、いらつしやいませ！」

少年は恰好の割りに、爽やかな笑顔で俺を迎えてくれた。

店内はそこまで広くなく、テーブルも三台しか見られない。更に、人も全くおらず、あまり出入りはよくなさそうだった。

「この人は私の仲間の秋田亮介さんです」

「……仲間？」

しかし、さっきまでの笑顔は何処に消えたのやら。鈴刃が俺を紹介すると同時に、少年がいきなり睨むような目で俺を見つめてきた。しかし、元は軟弱そうな顔つきをしているせいか、怖いと感じることは全く無かった。しかし、理由は何にしる少年が怒っているのは明瞭なので、あまり刺激しないように注意を払うことにした。

「あなたは一体、鈴刃ちゃんの何なのでしょうか？」

「何なのと言われても……昨日、会ったばかりだし」

「昨日！？ それなのにあなたは鈴刃ちゃんの仲間として、一緒に行動を共にしているのですか！ 僕なんて、三年間も掛けて、こうして鈴刃ちゃんと仲良くしているというのに……あなたは何て憎たらしい人間なんだ……！」

少年が悔しがっているのか、右手の拳を強く握りながら言った。俺は、視線を鈴刃に向けると、彼女も苦笑いを浮かべていた。

「アレンさん、私と亮介さんは何も無いから大丈夫ですよ。それよりも、テーブルに案内してくれるとありがたいです」

「……はッ！ すみません、こちらのテーブルにご案内します」

しかし、鈴刃の一言でアレンと呼ばれる少年は我に返ったようで、俺たちを一番右端にあるテーブルに案内してくれた。俺と鈴刃は向かい合うように椅子に座ると、メニューを開いて何を頼むか考え始めた。

「お、案外安いんだな。心配して損した」

「そうです。この店は、とても安いのに味も確かなんです。亮介さんには、いつか是非ここを紹介したいと思ってましたが、丁度良く時間が出来てよかったです」

「でもな、ここの料理ってあまり分からないんだよな。とりあえず、ホットケーキを頼むか」

俺がメニューの中で唯一分かるホットケーキを注文しようとする
と、鈴刃が意外そうな目で俺のことを見つめてきた。

「へえ、何だか見た目の割には可愛いものを頼むんですね」

「まあ、元から少食だったし、金に余裕も無いからな」

俺はメニューを閉じて言った。そして、テーブルの端に置いてある呼び鈴を持って、それをチリンチリンと鳴らした。すると、すぐにアレンがテーブルまで駆けつけてきた。

「ご注文は何にしますか？」

アレンは何故か口角を少しひくひくと震わせていた。どうやら、

彼は俺にあまり良い印象を持っていないようだ。

「それじゃ、俺はホットケーキとコーヒーを。お前は何か頼むか？」
「じゃあ、私はコーヒーを」

俺たちの注文をアレンが書き終えると、彼は確認のため一度それを繰り返し言ってから、少々お待ちくださいと厨房に入った。

「なんなんだあいつは？ 何だか、俺はあいつに嫌われているようだが」

「まあ、アレンさんはああいう性格だから。あまり、気にしないでいいと思うよ」

「そうか？ それならいいんだが……」

俺は暇なので、メニューと一緒に置いてあった新聞紙を広げた。そして、俺は最初に兵士募集の広告を見つけた。勿論、この世界は完全に平和なわけではない。この国も、近頃他国と戦争を起こすように、そのための兵士を募集しているようだ。

「兵士募集の広告ですか……。亮介さんは興味あるんですか？ 確か、魔法兵も募集してたと思うのですが」

「俺は命が惜しいからな。みすみす自分から命を無駄にするようなことはしない」

「命が惜しいって……魔王を倒したいと考えてる人間の言うことですか」

「何を言ってるんだ？ 俺は魔王を倒すんだ。命を捨てることなんてしないさ」

俺がきつぱり魔王を倒すと言ったのけると、鈴刃はそんな俺の顔を見つめてクスツと笑った。

「そうですよね。流石、亮介さんです」

俺は何がおかしいのか、少し首を傾げると、丁度良くアレンがホットケーキとコーヒ―二つを運んできた。

「お待たせいたしました。ホットケーキとコーヒ―でございます」

俺と鈴刃はそれぞれ適当に感謝をしながら、運ばれたものを受け取った。俺はまずホットケーキをナイフで半分に切って、更にもう半分に切った。ケーキは三枚重なっていたが、その中の一番上のケーキにフォークを刺して、それを口の中に運んだ。

「……うん、中々美味い」

ホットケーキの生地はとても軟らかく、そこにバターと蜂蜜がうまく絡んでいて、とても美味しい。しかし、俺に物をゆっくり味わうような穏やかな性格は備わってなかったので、さっさとケーキを平らげてしまった。そして、その生地をコーヒ―で流し込んだ。

「本当にそれだけで足りるんですか？」

「ああ、十分だ。あまりたくさん食べても戦闘で動きづらくなるかな」

「亮介さんは魔法使いでしょうが」

俺たちが向き合って談笑していると、その後ろで完全に顔を引き攣らせながらこつちを見てるアレンがいた。そこで、俺は確信を持った。この男は鈴刃に気があると。

しかし、俺はそういう人のプライベートを弄るのは好きではないので、別に確信を持ったからといって俺にとってはどうでもいいこ

と
だ
っ
た。

第十一話 刀

「それにしてもあなたはこれから鈴刃ちゃんと何処へ行くつもりなのでしょうか？」

まるで口角を釣り針で引っ掛けられたように、不自然な笑みを浮かべているアレンが俺に尋ねた。俺はその表情があまりにも面白かったので、クスツと軽く笑ってしまった。

「今からギルドに頼まれた依頼をこなしにいくんだよ。リザードマンの討伐だけど」

「リザードマン？ まさか、あなた洞窟のリザードマンを倒しに行くんですか？」

アレンの表情が真剣なものに変わる。俺は、その表情の変化を見た途端、僅かながら違和感を覚えた。恐らく、今の反応だと彼はリザードマンのことを知っている確立が高い。そこで、いきなり真剣な表情で聞いてくるということは、もしかしたらその魔物が危ないということを示しているのかもしれない。

俺が額から汗を流しながらアレンのことを見つめていると、彼は突然大笑いし始めた。

「ハハハッ！ 鈴刃ちゃんの実力なら、リザードマン如き何匹掛かろうが余裕ですよ！ まさか、あなたは鈴刃ちゃんにそんなレベルの低い依頼で満足してもらおうと思っているのですか！？」

俺は啞然として、勢いよく椅子からずっこけた。鈴刃もアレンのテンションについていくことが出来ず、椅子に座ったまま気抜けしていた。

俺はこめかみに十字を浮かべながら、アレンのことを睨んだ。そのままいつそ殴ってやるうかと思ったが、出入り禁止にされると面倒くさいので堪えた。

「まあ、冗談はさて置いて、洞窟のリザードマンは群れのボスだと聞いたことがあります。入る時は細心の注意を払うべきですね。鈴刃ちゃんに怪我をさせたら承知しませんよ」

すると、アレンは今度こそ真面目な話を切り出してきた。鈴刃だけではなく、俺も彼のテンションについていくことは出来なかったが、とりあえず分かったとだけ返事をしておいた。

「本当に承知しませんからね……？」

俺が立ち上がったところで、アレンは念を押すように顔を近づけて強調してきた。俺はいきなりのことに肩を震わせて、思わず手を上げていた。俺の右手ビンタが彼の左頬にクリーンヒットした。

「……あなたは痴漢に遭った女性ですか」

アレンは殴れた方の頬を擦りながら、涙目で俺に突っ込みを入れた。俺は違う、と一言で答えると、勘定だけ済ませてそそくさと店を出た。

「一体、なんなんだよ、あの男は」

「あの人は私がこの世界に初めて来た時に、最初に出会った人です。言葉が喋れない私に必死になって言葉を教えてくれたり、料理をこ馳走したりしてくれました。ちょっと変な人ですけど、とても優しくて面白い人ですよ」

鈴刃は苦笑いは解けないものの、アレンがこの異世界で初めて会った人間だということを教えてくれた。まあ、俺にとってジジイが感謝する人であるように、彼女にとってアレンという人物は大事な人間なのだろう。

「まあ、いい。それより、早く洞窟を目指そう」

「それもそうですね。今度、ちゃんとアレンさんを紹介してあげますよ」

俺たちはそれから数十分歩き、とうとう北の門を潜り抜けて草原へ出た。俺たちの目の前に広がるのは、広大な土地と住み渡る碧空と連なる山々だった。

俺たちが目指すのはそこから更に北西にある洞窟。

「そついえばお前つて、刀を使うんだつたよな」

「……？ そつですけど、何か？」

正直、成り行きで連れて来てしまつたが、俺はこの女がどれくらい戦えるのか不思議に思つていた。刀に関しては素人程の知識しか持ち合わせていないが、かなりの技量と熟練が必要だぐらいは分かる。だが、この世界に来て三年の鈴刃が本当に刀を使えるのだろうか。

俺が疑問に満ちた目で彼女を見ると、それに気づいたのか鈴刃が不満そうな表情を浮かべた。

「まさか、本当に私が使える人間なのか考えてませんでした？」

「ま、まさか……そんなわけないだろ」

「いいですよ！ じゃあ、ちゃんと証明してあげますから」

そつ言つて、鈴刃は手前一〇〇メートル程先にいるウルフを指差

した。すると、彼女は次にペットの鳥を呼ぶように口笛を鳴らした。勿論、それでウルフは俺たちの存在に気づき、車が走るような勢いでこちらに向かってきた。

彼女はそれを何もしないでじっと見ている。

ウルフはたった数秒で鈴刃の近くまでやってきて、そして思い切り跳んだ。そこで、鈴刃はキツと目を見開き、とうとう刀を抜いた。その瞬間、彼女の振りから曲線状の何かが現れた。それは、目にも止まらぬ速さで、ウルフの丁度顔を切り裂いた。獣の身体が縦に真っ二つに割れる。そして、軟らかいものが地面に落ちる音がした。俺は、驚きのあまり言葉を失った。俺が見た曲線の何か、あれは魔法によって放たれたものに違いない。

「驚きましたか？ 私はこれでも、何時かは忘れましたが昔から続く剣術の名家の生まれなのです。そして、更に風魔法も使うことが出来る、所謂魔法剣士なのです」

鈴刃は元からあまり無い胸を張って、自慢するように堂々と言った。そして、血で染まることもなかった刀をゆっくりと鞘にしまった。

第十二話 モスキート

「それにしても鎌鼬のような技だったな……あれなら何でも切断できんじゃないか？」

「それは、技を使う人間と相手によります。今回のリザードマンにはこれが通用するかは分かりません」

鈴刃はこちらを向くことなく言った。それでも俺は彼女の力に恐怖さえ感じていた。

実を言うと、ここにいるウルフは村の周辺にいたものとは比較にならないほど強いのだ。それは、ウルフの毛の色などを見れば分かる。村周辺にいたものは茶色の毛だったが、真つ二つにされたウルフは深緑色の毛を持っている。これは、マナをどれだけ吸収したかによって変わるらしい。

つまり、鈴刃はそのウルフをいとも簡単に殺してしまったのだ。

「さあ、そろそろ洞窟に着くはずですから、準備をしておいてください」

「分かってる。お前こそ、実力は知れたが、あまり無茶はするなよ」
「お気遣い感謝します」

俺たちが街を出てから数十分が経った頃、とうとう目的の洞窟らしき穴を発見した。そこは、思わず見上げてしまうほどの切り立った崖の壁に開いていた。中は非常に暗く、奥の様子を伺うことは出来ない。

俺は、これといって灯りというものを持っていなかったもので、やはり杖の先に火を点けて中を照らすようにした。

洞窟は、サッカーゴールを横のままで運べるほどの幅があった。俺は、その中央を辺りの魔物に気をつけながら進んでいく。

その途中で、俺は天井に三つの大きな目を持った蝙蝠がぶら下がっているを見つけた。すかさず、火の点いた杖をその蝙蝠に向けて、いつも通り細長い竜のような炎を放った。

蝙蝠は大きな目を三つとも見開きながら、炎に包まれて地面に落ちた。

「あら、どんな魔物にでも遠慮はしないんですね」

「無抵抗だとしても、どんな危険があるかは分からないからな」

俺は火が消えてしまったので、もう一度同じように火を点すと、鈴刃の言葉に答えた。基本的に俺は、全く関係の無い位置にいる魔物以外は倒すようにしている。真下を通りかかったところで、いきなり蝙蝠に飛びつかれたら堪らないからだ。

「それにしても、広い洞窟ですね」

「ああ、そうだな。この中からリザードマンを見つけるのは大変そうだな」

「前にも説明しましたが、あの魔物は僅かながら知性を持っています。くれぐれも気をつけてください」

俺が地球にいた頃にハマっていたRPGには、リザードマンはよく剣と盾を持って現れてきたことを覚えている。それは、奴に知性があつて武器を使うことが出来るからだ。ただでさえ、表面の皮膚は硬いというのに、弱点である心臓周辺を盾で守られたりしたら、奴を倒す難易度は一気に上昇するだろう。

少し歩くと、俺たちは分かれ道へと辿り着いた。

「これ……どっちに進めばいいんだ？」

「えっと、左側の道の壁に爪で付けられたような傷がありますよ。もしかしたら、これはリザードマンが付けたものなのではないでし

ようか？」

「なら、左に進めばいいのか？」

「どちらかに進まない限りは、何時間もここで目的が出てくるのを待つことになります。左に進みましょう」

俺は鈴刃に言われるまま、左の道に進む事にした。確かに、こっちの壁には夥しい程の傷が付けられている。これは、何かの生き物が故意的にやったものと思えない。

洞窟の中は身が凍える程寒い。出来ることなら、早くここから抜け出したかったのだが、鈴刃の予想は見事に外れてしまった。

左側の道はそのまま一本道で、俺たちは丸いドーム状の部屋に着いた。その奥には続く道が存在せず、この部屋で行き止まりのようだ。しかし、リザードマンらしき魔物の姿は見られない。

「やばいんじゃないか、あれ……リザードマンより凶暴そうだぞ」
「確かに……ちょっと不味い事になりましたね」

確かにリザードマンはこの部屋にはいなかったが、代わりに一匹の巨大な虫がいた。その形は夏になるとよく出てくる蚊のそれに似ている。しかし、そのサイズは二階建ての平凡な一軒家くらいはありそうだ。

更に、口吻の先からは血のような赤い液体が滴っている。恐らく、この部屋に間違っただけで来てしまっただけで、奴の餌食になってしまった人間やその他の魔物のものだろう。

「ぶざけんなよ、あんなのに刺されたら一溜まりもないぞ！」

「落ち着いてください。あの大きさだったら、この部屋から抜け出すことは不可能です。なら、私たちが先にこの部屋から抜け出せば、あれが追ってくることは出来ません」

「なるほど、ならば奴の隙を縫って、一気に部屋を抜け出すぞ」

だが、俺たちの考えた作戦は、早くも崩れ去ってしまった。何故なら、奴の口吻から放たれた衝撃波のようなものが壁にぶつかり、落ちた岩石が唯一の道を塞いでしまったからだ。

俺はいき나りの攻撃に驚いて、思わず前の方に飛び込んでしまった。結果、この部屋から抜け出すことが出来なくなってしまった。鈴刃もどうやら同じ境遇に立ってしまったようだ。

「これはもう、戦うしかないのか……」

「そのようですね。でも、リザードマンを倒すなら、一匹の蚊くらい潰せなくてどうするんです？」

そういつて鈴刃は刀を抜いた。さっきと同じ空気の刃が、巨大な蚊に向かって放たれる。

しかし、その攻撃は奴にはまるで効かなかった。鈴刃はまるで、自信を損なわれたように口を開けて絶句した。

俺は自分の杖を奴の顔に向ける。そして、そこに向けて俺は炎を放った。しかし、蚊はさっきと同じ衝撃波を出して、俺の炎を無効化した。

「クツ！ あれはマナの衝撃波か！」

「あれは、伊達にマナを過剰吸収してませんよ！ そう当分はマナは尽きないと思います！」

鈴刃が我に返ったように叫んだ。

魔物はさっきのウルフの時に説明したように、マナをどれだけ多く吸収したかによって、その強さも比例して変わる。普通、蚊が魔物化したのならば、最高でも人くらいの大きさになれば充分なほどだ。それにも関わらず、奴の大きさはその何倍何十倍もある。

俺は、初めて魔物相手に殺されるかもしれないという危機感を覚

えた。そして、それを見すかのように、俺の額からは滝のような多量の汗が噴き出てくるのであった。

第十三話 脚力

巨大蚊は恐らく血に飢えている。その口吻からは血が滴っているにも関わらず、まだ潤いが足りていないようだ。

そして、その蚊が持つ二枚の羽が揺れ、そこから奇妙な音が鳴り響いた。単純な音の大きさだけではなく、脳の奥底にまで入ってくるようなしつこい音だ。俺と鈴刃は必死になって耳を塞ぐ。もし、このまま直接聴き続けていたら、脳の組織が壊れてしまいそうだ。

俺は、集中を保てないながらも、巨大蚊に向けて炎を放った。すると、奴は衝撃波で炎を無効化する代わりに、何とか嫌な羽音は治まった。

「これはヤバいぞ……まだ耳がキーンとする」

「早めにアレの弱点を見つけないといけませんね……しかし、風も炎も効かないとなると、どうすれば良いのでしょうか……？」

考えている間にも、巨大蚊はこちらに向かって衝撃波を撃ってきた。

「聖なる神の吐息よ、我が身を護る盾となれ！」

それに逸早く気づいた鈴刃は、両手を組んで呪文を唱えた。すると、彼女の周りから緑色の魔法陣のようなものが現れ、二人と衝撃波の間に見えない壁が作られた。衝撃波は、その壁に威力を失くされて消えた。

今のように、まだ熟練されていない魔法には呪文を唱える必要がある。更に、呪文を唱えた後は魔法陣が出てきたりして、かなり時間が掛かる。その隙を縫われたら、一巻の終わりだ。

俺は鈴刃に軽く感謝をすると、自らも杖を奴に向けて呪文を唱え

た。

「火の神、カグツチの怒りの劫火は、一つの邑を焼き払う。今、我にその力を与え、己の怒りを抑え給え！ 加具土命之怒号！」

俺が呪文を唱え終えると、自分の周りが赤く光っていることに気が付いた。魔法陣が展開されている証拠だ。そして、その陣が一層輝きを増したかと思うと、杖から今までの炎とは比較するのも失礼なくらい強力で巨大な炎が出現した。その勢いで、俺の身体が思い切り後ろに倒れそうになっただけだ。

だが、これ程の威力ならば、手応えも充分にある筈だ。俺は期待をしながら、その炎が消えるのを待った（魔法なので、本物の炎より早く消える）。

しかし、その炎が消えると同時に、俺は崩れ落ちるように地面に膝を付いた。

巨大蚊には、僅かたりとも損傷の痕が見られなかった。

「何でだ……！ 何故、奴に攻撃が効かないんだ！？」

「……？ ちょっと待ってください、亮介君、あの蚊の周辺をよく見てください！」

「え………？」

俺は鈴刃に言うことを聞いて、蚊の周辺を観察してみることにした。すると、俺は驚愕すべき事実に気が付いた。

巨大蚊の周りには、僅かだが青白く光るマナの防御壁が展開されていた。

つまり、今までの俺たちの攻撃は、全てあの壁に阻まれていたということだ。

「あれじゃ……もう、攻撃のしょうが無いじゃないか……マナの展

開を解除する方法なんて知らないぞ……」

「いや、マナの壁だったら、物理的な攻撃は防げない筈です。私が刀でアレの首を落とすしかなさそうですね」

「なるほど。だが、奴に近づくのは至難の技だぞ？　あまり、無茶はするな」

「分かりました」

鈴刃にそう言い聞かせると、俺は杖を巨大蚊より少し上の壁の部分に向け炎を放った。すると、上手く奴の意識が炎の方に向いたようだ。そのうちに、鈴刃が奴の身体に向かって走り始める。そのスプードは、地球にいた頃の俺よりも全然速かった。まるで、チータが牙を向けて駆けているかのようなだった。

鈴刃は急に方向をずらして、壁の方へ走った。そして、その壁をまるで重力を無視するかのように二つの脚で上り始めた。

「あれは……人間の出来る業じゃないな……」

俺はそんな鈴刃の運動能力を見て、尊敬や驚愕を通り越して呆れの感情すら芽生えさせた。

当の鈴刃は、丁度良い高さまで上ると、そこから壁を蹴って蚊の本体を目掛けて跳んだ。そして、彼女は刀を抜いて、空中で一振りした。

鈴刃はそのまま地面に落下したが、ちゃんと着地をしたようだ。

そして、そこから時間差でもう一つ巨大な物体が落下した。言うまでもなく、それは蚊の頭だった。

「何とか、倒せてよかったです。それでは、出口を塞ぐ岩を取り除きましょうか」

そう言うと、鈴刃はもう一度刀を横に振った。そこから、風魔法

で出現したカッターが岩に衝突し、まるで爆弾が爆発したかのような衝撃が生まれた。そして、彼女はそこから更に何連続も風の刃を放つ。すると、何回目かは分からないが、道を塞いでいた岩は完全に取り除かれた。

「ハハ……………凄いね……………」

「そう言ってもらえると嬉しいです」

鈴刃は片手で口を押さえながら上品な笑い方をすると、刀を鞘に戻してさっきの分岐点に行こうと歩き始めるのだった。

第十四話 過去

三つの道の分かれ目である分岐点に俺たちは再び戻ってきた。洞窟は依然、魔物は少なく静かで、逆にそれが洞の不気味さを際立たせている。

「それじゃ、まだ行つてないこっちの道に向かうぞ」

「分かりました。それでは、いきましよう」

鈴刃は俺の一步前を歩くように、まだ行つてない最後の道を辿り始めた。俺は女の子に先を歩かれるのが何だか恥ずかしかったので、そそくさと彼女の前を歩き始めた。

「亮介君、前方に蛇の魔物の姿が見えます」

「分かった。俺が始末するよ」

鈴刃に教えられて、俺は数十メートル先に蛇型の魔物がいることに気がついた。蛇型は隙を取られると、丸呑みにされる可能性もある。しかし、奴は炎系の魔法に弱く、倒すことが出来なくても、火を見ただけで何処かへ逃げるだろう。

俺は杖を魔物に向けた。そして、無言のまま杖の先から細長い火の竜を出現させた。それは、上手く蛇の身体に直撃し、燃え盛る業火が炭に変えるまで蛇の身体を包み込んだ。

俺がその蛇の上を歩く頃には、蛇の身体は黒く焦げていて、鼻につく焦臭さが気になった。だが、こうすることで正確に魔物を倒すことが出来るので非常に楽だ。

「素晴らしい魔法です。尊敬しちやいますね」

「褒めるなら、まずその棒読みをやめろ」

実際、俺の魔法が蛇の魔物を一発で倒す力があるが、鈴刃の腕には敵いそうもない。さっきの蚊との戦いで、それを嫌な程思い知らされた。ここに来たのが二年早かっただけ、と侮っていたが、今思うと恥ずかしくて穴があつたら入りたい気分だ。

そんな思いで道の上を歩いていると、俺は何か石のようなものに躓いた。転びはしなかったが、少しでも反応が遅れたら泣きっ面に蜂の状況になっていたに違いない。

そんなところから、俺は若干の苛立ちを混ぜて、その石のようなものを確認した。しかし、それは決して石などではなかった。

俺が見た物は、所々に砂を被った白い球型の物体だった。そう、人の頭蓋骨だ。

俺は一瞬にして自分の顔が青褪めていくのが分かった。その頭蓋骨は半分近くが砂に埋まっていて、それなら転んでしまつのも頷ける。

しかし、何故このような場所に人骨があるのだろうか。考え付く答えは一つしかない。

「この近くにリザードマンがいるということか」

「そうですね。それでは、ここからは気を抜かないで、周りの音や振動に全神経を集中させてください」

鈴刃が言う。俺はゆっくりと頷いた。

俺は手を合わせて、その人骨を吊った。もしかしたら、これがリザードマンに怪我を負わせた人間なのかもしれない。俺の背中に冷たい汗が溜まっていくのを、自分の皮膚が感じ取っていた。

「それにしても、お前って冷静過ぎるよな？」

俺は鈴刃に尋ねた。あの巨大な蚊に出くわした時にしろ、彼女の

泰然自若とした姿には不思議に思わずにはいられない。

「私の目的を果たす為には、恐怖の感情などを抱いている場合では
ありません」

「目的……………」

「元の世界に帰って、私の祖父を殺した犯人に敵を討つことです」

そういつて、彼女はゆつくりと刀を取り出した。そして、銀色に
煌めく刀を眺めながら続ける。

「私の祖母は、剣術においては世界中のどの人間にも負けないと聞
きました。そして、私は剣術を学ぶ身として、祖父のことを尊敬し
ておりました。しかし、祖父は私が生まれる前に殺されてしまつた
と母から聞きました。だから、私は祖父を殺した犯人に敵を討つた
め、日々剣の練習をしていました」

「だが突然、この世界に連れて来られてしまったと」

俺が言うと、鈴刃はこくりと首を振った。

そして、彼女は斜め上から斜め下へ刀を下ろした。そして、そこ
から出現した風の衝撃波が、向かう道の奥へ放たれた。

俺はその刀筋を呆然とした表情で見つめていた。すると、奥の方
から何かと何かが衝突する凄まじい轟音が聞こえた。俺はその音に
一瞬身体を仰け反らせた。

鈴刃は何を考えているのか分からない、切なそうな表情で暗闇に
閉ざされた道の奥方を数秒間眺めると、ゆつくりと刀を鞘に戻した。

「行きましよう。こんな所で昔のことを思い出しても、何にもなり
ません」

「あ、ああ。そうだな」

少し進むと、岩で出来た凹凸の激しい地面に、一線の亀裂が出来ていた。恐らく、さつき鈴刃が放った魔法によるものだと考えられる。俺は思わず口を引き攣らせながら、苦笑いを浮かべた。

だが、そんな苦笑を浮かべている暇は、俺にはなかった。

よく見ると、ここはさつき巨大な蚊がいた場所と同じ、ドーム状の形をした部屋だった。部屋は、謎の青白い光で明るくなっていた。そして、部屋の一番奥に三メートルはあるう緑色の怪物がいた。

瞳が無く血のように赤く染まった目、口から溢れる粘々した唾液、完全にリザードマンとしての理性を失っているようだった。その理由は恐らく、右肩から右腕を切られてしまったことによる痛みと怒りによるものだと思われる。

そして、逆の左手には俺の身体くらいはあろう大剣が握られていた。勿論、右手は存在しないので、リザードマンはあの大剣を片手だけで持っていることになる。

「ここがリザードマンの巣ですか。奴は、非常に縄張り意識の高い魔物ですので気をつけて下さい。理性を失っているようですので、力は著しく上昇していると思われますが、剣の軌道は適当になると考えられます」

「そうか、やれやれ……これは厄介な戦いになるな……」

「本当ですよ、何でこんな依頼を受けたんですか」

俺たちは目線をリザードマンに向けたまま話していると、奴はけたたましい咆哮を上げると、地鳴りのような音を立てながらこちらに向かって走ってきた。

第十五話 リザードマン

リザードマンの突進は素早く激しいものだったが理性を失っている分、まさに猪突猛進というべき単純さだった。俺と鈴刃は分かれるように左右に逃げた。そしてリザードマンが大剣を一振りする。俺たちは既に逃げていたので、その攻撃が当たる事は無かったが、元より存在した亀裂に新たな線が上書きされた。

「なんて馬鹿力だ。いつか、大剣が悲鳴を上げるぞ」

俺は呆れたように言いながら、炎を奴に放った。隙だらけだったリザードマンの身体に炎が直撃したが、奴は火傷一つ負うことなくもう一度咆哮を上げた。

「リザードマンはどんな岩山や洞窟にも対応出来るように皮膚が硬く作られていますよって、さっきも言ったでしょう！ 本当なら、奴の右腕が切断されていること自体凄いことなのですよ！」

リザードマンを挟んで、向こう側から鈴刃の声が聞こえた。そういえば、そのようなことを彼女が言っていたのを忘れていた。俺は一度だけ苦笑を浮かべると、今度は奴の心臓に向けて炎を放った。炎は宇宙空間で物を飛ばすように真っ直ぐと目標へ向かった。しかし、その炎はリザードマンが持っていた大剣によって防がれた。理性を失っても、自己防衛能力はちゃんと働いているようだった。

「これはちよつと大変だな……動きの素早い鈴刃なら一突き出来そうな気もするが……」

しかし、それを行うには巧く奴の隙を取るしかない。奴は大剣を

まるで片手剣のように扱うことが出来る。いくら剣捌きは雑であっても、もしもの場合を考えなければならぬ。その場合、あのような大きな剣を回避することは不可能に近い。

俺はもう一度、リザードマンの心臓に向けて炎を放った。その炎はさっきと同じように大剣で防がれた。しかし、同時に鈴刃が奴に向かつて動き出していた。そして、彼女は刀を抜いた。

だが、そこでリザードマンはさっきよりもでかい咆哮を上げた。それに怯んでしまい、俺も鈴刃も攻撃を止めてしまった。まるで、零距离から獅子の雄叫びを聞かされるかのようなだった。

「なんて咆哮だよ、鼓膜が破れるかと思った……」

だが、リザードマンの反撃はそれだけでは終わらない。奴は怯んで動きが止まっている鈴刃に向けて、大剣を下ろそうとしていた。俺は不味い、と三度同じく炎を奴に向けて放つ。奴はそれに気づくと、剣を振り下ろすのを止めた。それと同時に、鈴刃がハッと我に返ったようだった。

「すみません！ 少し怯んでしまいました！」

鈴刃が後ずさりながら、俺に感謝と謝罪の言葉を叫ぶように言った。しかし、奴のあんな咆哮を間近でくらったら、俺も同じように怯んでいただろう。

「しかし、完全に不利な戦いだ。右腕のハンディを抱えているにも関わらず、奴の元からの特性によって攻撃が制限されている」

そこで、俺は新たな魔法を使うことを考えた。ジジイから聞いた、今までの魔法よりも素早く目標に向かうものだ。

俺は確かに記憶に残っている呪文を唱える。

「カグツチの神聖なる炎よ、その自由自在な身体を矢に変えて、光のように宙を駆けよ！」

そして呪文の詠唱が終了し、リザードマンの心臓に向けられている杖の先に魔法陣が現れた。すると、目で確認することも出来ない速さで、何かが奴に向かって飛んだ。これが、炎の矢と呼ばれる魔法だ。

しかし、その魔法は命中率が悪いらしく、魔法は奴の脚に当たっただけだった。俺は一度舌打ちをした。

リザードマンは急に俺の方へ顔を向けた。俺は何をするんだ、と緊張に額から汗を流しながらも、何が起きてもいいように構えを取ると、奴はその口から炎を吐いてきた。

俺はいきなりすることに驚きながらも、杖を向けて炎の壁を出現させる。この魔法はジジイに何度も叩きこまれており、そこまでレベルの高い魔法ではないので、しっかりと熟練していた。

炎と炎は上手く相殺されて、無力と化した。

「火も吹けるのかよ……なんて野郎だ」

「亮介君！　すぐに私と奴を結ぶ直線から離れてください！」

突然、鈴刃がそう叫んだ。俺は何のことだか分からなかったが、とにかく言われた通りに離れることにした。

すると、彼女は静かに呪文の詠唱を始めた。そしてそれが終わると同時に彼女は抜刀した。そこから、まるでギロチンの刃のような風が出現した。その風を実際に目で確認することは出来なかったが、その軌跡のようなものは見ることができた。風の刃がリザードマンの横腹に衝突する。

「……な、何で！？」

しかし、リザードマンの横腹はほんの僅かな流血しか確認出来なかった。それには俺も鈴刃も絶句するしかない。

そして、自分の攻撃が効かなかったが為に動きが止まっている鈴刃を狙って、リザードマンは火を吹こうと息を吸い始めた。

俺は危ない、と鈴刃に叫ぼうとした。あまりに突然な出来事に、魔法を放つことも出来ない。

「さあ、そこまでですよ！　鈴刃ちゃん、後は僕に任せてください！」

リザードマンが息を吸おうと身体を反らした瞬間を狙って、一筋の光のような矢が奴の心臓に向けて飛んだ。そして、その矢は巧くリザードマンの左胸に当たる。

俺は矢が放たれた方を向いた。そこには、弓を構えている赤髪の青年がいた。

「あ、あいつは……アレン！」

「あなた、鈴刃ちゃんを危険な目に遭わせたら承知しない、と言いましたよね？　これだから、戦い慣れのしていない人間は困るんです。ほら、見てください、僕の放った矢によってあのリザードマンは今頃地面に伏して……」

アレンが自信満々に言うが、彼の指差す方向には更に機嫌を悪くしたリザードマンがいた。そして、それを見ると同時にアレンの顔が次第と青褪めていく。

「アレンさんッ！　リザードマンの心臓は右側にあるですよ！？」

「そ、そんな……ッ！」

「ダメエ！　格好良く登場するなら、せめて倒せよ！」

俺は思わずアレンに向けて怒鳴っていた。しかし、そんなことをしてはリザードマンに隙を見せてしまうので、この件は保留にしておくことにした。一応、助けてくれたことには変わりない。リザードマンは再び耳を劈くような咆哮を上げながら、左胸に刺さった矢を抜いた。そして、それを俺に向けて投げてきた。矢はさっきのアレンのものよりは遅かったものの、確実に俺の顔を目掛けて飛んできた。

『危ない！』

だが、矢は俺に到達する前に発火して、地面に落下し燃え尽きた。俺は何事だ、とその声がした方を向く。すると、俺がこの世界で一番会いたくない人間が、宙を浮いていたのだった。

『亮介君、怪我はありませんか！？　ちょ、あのリザードマン……地獄に落として見せますよ……』

その瞬間、洞窟内の空気が一瞬にして変わった気がした。何と云えばいいのかわからないが、よくわからない重力が掛かっているかのようだ。そして、それがセレナの怒りの力だとは誰も知る由もない。

『消えなさい、蜥蜴』

セレナが一言呟くと、リザードマンが内側から急に破裂した。頭と手足が四方に吹っ飛び、血の赤色に染まった肉片が飛び散った。俺はその様子を見て、引き攣った笑顔で笑い声を零すことしか出来なかった。

第十六話 キスからの逃亡

俺も鈴刃もアレンも、予想もしなかった突然の介入に驚愕の念を感じられずにはいられないだろう。現に、三人とも口を精一杯に開けながら、その場に立ち尽くしてしまっている。だが、その中でも俺が我に返るのは断トツで早かった。理由は至極単純、命の危機を感じたからだ。

「亮介君、無事ですか？ もし、亮介君が怪我を負ったらどうしようかと……ずっと考えていました。でも、無事そうなので良かったです」

セレナは胸の前で手を組みながら言った。その様子は、誰が見ても美しいと思う筈なのだが、俺にしてみれば包丁が出るのはいつなのか緊張に身を縛られてしまう気持ちだ。

セレナは地球でいうヤンデレという種族に該当する。俺はそっち方面の知識には乏しいのでよく分からないのだが、精神的に病んでしまった人間のことを言うらしい。相手を愛するが故に殺してしまったり、他の女性に接することを断じて禁止したり、ともかく危ない人間なのだ。

つまり、彼女と一緒にいる時点で、俺の命はあつてないようなものなのだ。だから、何としても彼女から離れなければならない。そして、何があっても俺は鈴刃のことを守らなければならない。

「あら？ そこにいる子は誰ですか？ 何故、亮介君の近くにいるのでしょうか、ね？」

再び部屋内の空気が重くなったような気がした。このままでは鈴刃もあのリザードマンと同じ顛末を迎えてしまう。

俺はセレナに向かって、必死に叫び取り繕おうとする。

「違う！ 彼女は偶々洞窟に迷い込んでいたハンターだ！ 俺とは何の関わりも無いし、関わりたいたも思わない！」

少々酷い言葉だが、セレナを納得させるにはハッキリと言っしかない。現に、我に返ったばかりの鈴刃は俺の言葉に衝撃を受けていたが、彼女は非常に物分かりの良い女性だった。

そして、セレナ自身も物語に出てくるようなヤンデレよりはまだ、物分かりは良いほうだと思っている。それだけで、簡単に人を殺すような真似を彼女がする筈もないだろう。

「それは本当なのですか……？」

少し怪訝そうな表情を浮かべながら、セレナは俺たちに尋ねた。俺と鈴刃は脳漿が掻き混ぜられるのではないかというくらいに首を縦に振った。

「そうですか。なら、信じると思います。それでは、リザードマンも倒したことですし、報酬を貰って良い宿を探しましょう。丁度、お金なら私がたくさん持っていますし」

「そうか。それじゃ、俺は依頼主のもとへ行くから、セレナは良い宿を探してくれ。そっちの方が効率的だろう？」

「その間、亮介君と離れ離れになってしまうのは寂しいですが、了解しました。それでは、洞窟までは一緒に歩きましょう？」

そう言うと、セレナはスウツと地面に着陸した。そして、凄まじいスピードで俺のもとへ走ってきた。そして、岩も砕けるんじゃないかという握力で、俺の手を握ってきた。俺はあまりの激痛に顔を顰める。

「ああ？ イタイイタイイタイイタイ！ もう少し力を弱めてくれ？」

「あ、ごめんなさい！」

セレナは申し訳なさそうな表情を浮かべると、手の力を弱めてくれた。手の骨がイッてしまったような気もするが、何とかセレナの手を握り返すことくらいは出来た。

俺はセレナに引っ張られるような形で出口へ向かって歩き出した。その際、俺は後ろを向いてアレンと鈴刃に洞窟の入り口で待ってほしいとアイコンタクトを送った。しっかりと伝わった自身は無いが、これくらいしか俺に思いつく方法は無かった。

「もう外に着いたのですか……残念です……」

セレナはまるで受験に失敗した学生のような絶望に満ちた声を上げた。俺は言葉の掛けようがなく苦笑いを浮かべると、それに気づいたのかセレナが無理に笑顔を振りまいた。

「あ、私のことは心配しなくて大丈夫ですよ！ それじゃ、私は行きますね！」

そう言うと、セレナは鳥のように宙を飛び始めた。ちなみに、俺は彼女のことを心配した記憶など微塵たりとも無いのだが、どうやら彼女は勘違いしてしまっているようだ。

「それより……アレン、鈴刃！」

俺が後ろを振り向いて呼ぶと、洞窟の陰からアレンと鈴刃が現れた。二人とも、完全に青褪めた表情をしている。無理もない、俺も

この場で泣きたい気分だ。

俺たちは街に戻って、依頼主から契約書に印を貰うと、それをギルドに持っていった。すると、報酬金として五五〇〇オーラムを貰った。目にしたこともない大金に、俺の目は輝きを帯びていた。ちなみに、この通貨の価値はほぼ日本円と一緒になので、本当は五五〇〇オーラムはそこまで大金というわけでもない。

「よし、それじゃ街を出るぞ。ここにはリザードマンより怖い化物がいるからな」

「それに関しては賛成です。あの人の目……あれは完全に濁りきった病的な目です」

「だけど、僕は店もあるんだ。あなたたちについていくことは出来そうにありません」

「ん？ ああ、まだいたんだ」

「何だか僕の扱い酷くない！？」

アレンは最後まで俺のことを睨みながら、自分の店へと戻っていた。ここで、俺は本題に入ることにした。

「だが、これから俺と一緒にいるということは、常に命の危険が伴うことになるぞ？ それでも、俺についてくるというのか？」

俺が聞いたのは、彼女に俺と同行する気があるか、という質問だった。勿論、セレナはいつまでも俺のことを追ってくるだろう。その時に鈴刃と一緒にいるのを見られると、色々和不味い所がある。

しかし、鈴刃は俺の質問に快く頷いてくれた。

「確かに、あなたと一緒にいるのは危険です。しかし、あなたがいないと魔王を倒すなんてことは到底できそうにもありません」

鈴刃はニツコリと微笑みを向けた。それを見て、不覚にも俺は彼女のことを可愛いと思ってしまった。勿論、過去のトラウマもあるので、それを口に出すようなことは絶対にしない。

「なら、さつさとこの街から立ち去ろう。早くしないと、セレナが来てしまいそうだ」

「それもそうですね」

俺たちは颯爽とこの街の南門から別の街を目指すことにした。

そして、その南門を越えた時のことだった。何処からか、鈴を転がすような女性の声が聞こえた。

勿論、それはセレナの声だった。そして、俺は地面に降り立った彼女の目が汚水よりも濁っていることに気づいた。

「そこにいる女性は……偶然会っただけの人じゃなかったんですか？ まさか、亮介君は私に嘘を吐いた……と？」

セレナが少しずつこっちへ歩いてくる。その姿、オーラに近くいたウルフは危険を予知してこの場から走り去ろうとしている。それほどの殺気が、今の彼女からは感じられる。

殺される……！俺は覚悟した。

しかし、彼女が起こした行動は俺の予想の範疇を大きく上回るものだった。

「……………？」

「なっ……………！」

何を考えたのか、セレナは自分の唇を俺の唇に重ねてきたのだった。いきなりの奇行に俺は思い切り目を見開いて、鈴刃は驚愕のあ

まり絶句していた。

だが、これは同時にこれはチャンスでもあった。

「……………うっ！」

「すまん、セレナ。男として最低なことをしてることは分かっている。でも、俺は自分の命が惜しいんだ！」

俺はセレナがキスをしてきて隙を見せてきたのをチャンスに、彼女の鳩尾に拳を入れた。その拳は見事綺麗に決まったようで、セレナは苦しそうに顔を顰めながら地面に手を付いた。そして、次に俺は予め道具屋で買っておいた睡眠草を彼女の口の中に入れた。すると、時期に彼女は痛みから解放されたように、夢の世界に入った。その寝顔は、まるで無邪気な子供のそれと同じようなものだった。寝ている時はこんなにも可愛らしいのに……。俺は残念でならなかった。

そして、俺は眠ったままのセレナを南門の兵士に押し付けると、当てがないにも関わらず次の街を目指して歩き出した。

「あれは……流石の私でも引きまします……。いくらなんでも、やってることは鬼畜同然ですよ……」

だが、それからというもの、数分周期で鈴刃から棘を刺されるので、俺の心は傷だらけになっていた。

第十七話 食事

「さて、飯が出来たぞ」

「ありがとうございます」

俺は鍋から掬った汁をお椀に入れて鈴刃に渡した。

結局、半日で他の街に着くことは出来ず、夜も深くなってしまったので俺たちは野宿をすることにした。

更に、運の良い事に俺たちは猪の魔物に巡り合うことができた。それを狩って猪鍋を作ったのだった。テントも鍋もお椀も鈴刃が持っていたので、本当に助かった。

「寒い日に、こんな暖かい鍋は堪らないな」

「その通りですね」

「何か、態度が冷たくなってないか？ お前だって、あれくらいのことをしなければ殺されてたかもしれないんだぞ？」

「別に……冷たくなんかなっていませんよ」

彼女は猪汁を啜りながら言うのだが、全くこっちを見て言おうとしないので、俺はもはや苦笑いしか浮かべることができない。確かに、あの時セレナに対してとった行動は、後から考えると自分でも引くくらい最低なものだったと思う。

だから、俺はしょうがない、と手に持った暖かい猪汁を啜ることしかできなかった。今から弁解しても、彼女からの冷めた言葉遣いを止めさせることはできないだろう。

それにしても、今でも俺の頬は軽く熱くなっている。キスなんてされたことは、俺は生まれてから一度も経験したことはなかった。つまり、実質的にセレナにされたアレは、俺のファーストキスということにもなる。

「亮介君、顔が赤くなっていますよ」

「えっ？ いや、そんなことはないと思うが……」

「へえ、そうですか……」

俺には彼女の言葉が一層重く聞こえてならなかった。何故、俺はここまで彼女に憎まれなければならないのだろうか、極めて謎だった。

それからと言うものの、俺と鈴刃の間にはずっと沈黙が保たれることとなった。

「それでは、私は魔物除けの魔法を周辺に掛けておきます。亮介君は勿論、テントの外で寝ててくださいね？」

「分かってる」

いくら旅仲間と言っても、俺たちは特別な関係の持たない男女だ。そんな二人が同じテントの中で寝れるわけがないことくらい、俺は重々承知していた。

ちなみに、魔物除けの魔法とはある範囲でマナの障壁を張るものだ。そのマナは聖の特殊属性がついているらしく、それは魔物が一番嫌う属性だとジジイが教えてくれた記憶がある。

聖の属性魔法は基本的には闇を扱う人間以外は使うことは可能らしい。しかし、実際に使うとなると訓練が必要になるそうだ。魔法を学びはじめて一年くらいしか経っていない俺には、まだ扱うことの出来ない類だ。

俺は鍋やお椀などを近くの川で洗って、それをある程度乾かすとテントの中に入れた。鈴刃は既にテントの中で熟睡していた。俺は彼女を決して起こさないように、細心の注意を払った。

「俺も寝るか……」

マナの障壁は意外と広範囲に亘って張られていたようなので、俺は近くの木に背中をもたらせて寝ることにした。

空を見上げると、葉の陰に若干隠れて見辛いものの、煌々と輝く星々を確認することが出来た。俺はそれを眺めながら、ゆっくりと口元を綻ばせた。なんて綺麗なんだろう、とそれを愛でるような言葉が思わず口から零れそうだった。

更に、辺りからは様々な虫たちや生き物の鳴き声が合奏でもするかのように響いていた。俺は決して地球では出来なかっただろう体験の連続に、俺はこの世界にいることを完全に安んじているようだった。

「俺の親……どうしてるかな……」

そこで、俺はふと地球にいる自分の親のことを思い出した。しかし、決して会いたいという意味で言ったわけではない。

実は、俺の両親は離婚していて、俺は母親の方に引き取られていた。離婚の原因は、俺の父親の浮気によるものらしい。俺が物心ついてすぐの頃だった。

母親の方は、俺を養う為にたくさん働いてくれたが、それによるストレスを俺で発散するようになっていた。だが、ちゃんと雨を防げる場所で寝ていられると思うと、家庭内暴力もそこまで苦には思わなかった。

「今思えば……俺って変な奴だよな」

俺は親にどんな仕打ちを受けようが、学校内では誰とでも仲良くし、活発に行動していた記憶がある。それが結局、セレナに追われる原因を作ってしまったので複雑な心境なのだが。

普通なら、そんな虐待に近い行動を受けていれば、この世界が嫌

になる可能性だってある筈だ。

だけど、そう思うことがなかったのは、もしかしたら最初から親の愛を受けていなかったから、逆にそれが当たり前になっていたからかもしれない。

じゃあ、ジジイは今何をしているのだろうか。俺は本物の親のことを親とは思っていない。俺の親は、俺を一年間愛を込めて接してくれたジジイだと思っている。でも、俺はジジイを置いて、こんな旅に出てしまった。ジジイは確かにあの時、ここに残ってほしいと言った筈だ。

「……………結局、何が正しかったのだろうか……………」

そう呟いたのを最後に、完全に疲れに負けた俺は夢の世界に浸ってしまった。

陽の光が俺の目元に被った。俺は口を閉じたまま声を出しながら、腕を思い切り上に伸ばす。そして、ゆっくりと目を開くと、まるでダイヤが散りばめられたような木漏れ日が俺の視界に映った。

「おはようございます。昨日は亮介君に作ってもらったので、今日は私が朝ご飯を作りました」

そして、テントが張ってあった位置の方に目を移すと、そこには満面の笑みで料理らしきものを手に持っている鈴刃がいた。

「え？ ああ、何だか昨日の冷たさは無くなったな……………、けど……………」

俺は鈴刃の手元に視線を集中させた。彼女は黒い塊のようなものを持っている。しかし、その正体は起きたばかりで調理光景も見て

いない俺には到底分らないようなものだった。

そして、鈴刃はその笑みを崩すことなく、その泥団子のような物体を俺に手渡ししてくる。俺は出来れば断りたい気分なのだが、彼女が見たこともないような笑顔を浮かべているので、俺はそれを渋々受け取った。

「さあ、遠慮せず食べてください。私の自信作ですから」

そう言われても、その料理と思しき物体を見て快く齧^{かじ}りつく人間など、そうはいない筈だ。

鈴刃は何度も食べてください、とその料理を勧めるのだが、俺は見ても視線を逸らしての繰り返しで、どうしても躊躇^{ちゅうちう}ってしまう。

「あれ？ 食べないんですか？ じゃあ、私は先に食べますね」

そう言って、彼女は自分の分である黒い塊を一口、勢いよく頬張った。しかし、彼女は美味しいと言って、輝かしいまでの笑顔を振り撒き始めた。俺は思わず大口を開けて絶句してしまった。

もしかしたら、見た目が悪いだけで美味しいものなのかもしれない。俺はそう考えた。この世界には様々な動物があつて植物がいる。決してここは地球ではないのだ。だから、これがいくら見た目が悪くても、実は頬が落ちる程美味しい料理である可能性もあるのだ。現に彼女は美味しそうにそれを食べ進めている。だったら、逆にこれを食べないのは損に値するだろう。

俺は頬を伝っていく汗を袖口で拭くと、覚悟を決めてそれを一口頬張った。

「……………ッ！」

「どうでしたか？ 美味しかったですか？」

「……………あ、ああ。美味しかった……………」

正直、本当に泥を食ってるかのような食感だった。

俺は何とか表面上では彼女に美味しいという意思を伝えたものの、やはり耐えられずに川の方へと全力で疾走する。

金輪際、彼女の作ったものは食べない、と心に誓った瞬間だった。

第一八話 森

街を出てからというものの、見渡す限り広原だ。

木々や山々はそこらじゅうで見当たるのに、街や家々は中々確認できない。

「くらえ」

俺は杖から炎を出して、四つん這いになった人間くらいの大きさはあろう蟻の魔物を丸焦げにした。ただ、残念ながら蟻系の魔物は狩っても食い物にはならないし、良い素材が採れるわけでもないの
で、倒してもそこまで大きな足しになることはない。

俺は一息吐いて、また先へと歩き始める。

そろそろ、喉も渴いてきて、身体的にも疲労が溜まってきた頃だ。
俺は荷物入れから水筒を取り出して口をつけた。しかし、数滴の粒が舌に滲みこんただけで、俺の喉を潤してくれる程の量はもう入ってなかった。

「やばい……もう水筒の中身が切れた……」

「確かに、ずっと歩いているのに街が見つかりませんね。ここら辺の地理には、あまり詳しくありませんし、何処かに人の住んでいる小屋があれば良いのですが……」

ケントウムシシティにずっといた人間がこの周辺の地理に詳しくないとは甚だ疑問を覚えるところではあるが、目印も何も無いような場所では地図があっても無意味なようなものだろう。

「やっぱり、あの女の人に付いてきてもらえれば……」

「お前は死にたいのか？」

「流石に冗談です」

鈴刃がこの状況で冗談を言うような人間であるとは思えない。彼女もずつと歩き続けて頭の中も一杯一杯になってしまっているのだろう。だからといってセレナの名前を出すのは命知らずにも程がある。

その証拠にも、セレナの名前が出てきた瞬間に、俺の腕が鳥肌だらけになっていた。それほど、俺の身体が彼女に対して拒否反応を示しているようだ。酷い言い方ではあるが、俺は彼女に殺されかけているんだ。

「そんな睨まないでください……、私が悪かったですから」
「別に睨んでなんかないさ」

どうやら無意識に目が険しくなっていたのだろうか、鈴刃が隣で縮こまっていた。元から彼女は小柄な体系をしているので、その様子は非常に可愛らしいものに思えた。

「それにしても、昨日は寒かったのに今日はそれ程でもないな」
「急に話を逸らすのも怖いのですが……」

隣で鈴刃がブツブツ独り言を呟いているのだが、あえて反応しないことにした。

この世界では地域によって異なるが、日本と同じ四季は存在するそうだ。今の季節は丁度冬に当たるものだ。しかし、今日は昨日までの凜冽りんれつとした寒さはなく、太陽が燦然さんぜんとしていて逆に暖かいくらいだ。

そこから俺たちは一時間くらい歩いた。

「これは……中に入ったほうが良いのか？」

「ま、まあ……せつかくここまで来たんですし……」

俺たちの目の前には異様な怪しさを感じる森が映っていた。どうやら、ここは森の入り口に当たる場所のようで、ここを抜ければ街にいける、と近くの立て札に書いてある。一応、ちゃんとした立て札なので信憑性は高そうだ。

俺はどうにも気が進まないのだが、鈴刃がもう疲れきっているようで早く街に着きたいと考えているので、入ろう入ろうと促されて結局この中を進むことにした。

森の中は僅かに光は入っているものの、鬱々しく蒼然としていた。前は見えないことはないのだが、魔物との戦闘になったら不利にはなりそうだ。

「ここって、もしかしたら死屍系の魔物が出てくるんじゃないのか？ お前は大丈夫なのかよ」

「ホラー系のテレビはよく見ていた方でした」

「いや……テレビとリアルじゃ別物だろ……」

この世界には生物だけではなく、魂を持っていないものにまでマナが吸収されて動けるようになった魔物が存在する。所謂、地球でいうゾンビやスケルトンなどのことだ。それらの魔物は力や体力が無駄に多く、戦闘が苦しくなるだけではなく、何より外見が恐ろしい。慣れていない人間にとって、目の前でゾンビが襲ってくるのは発狂ものだろう。

しかし、実際に俺たちが死屍系の魔物と遭遇することはなかった。よく出てくるのは、やはり虫系か植物系の魔物だ。大抵、それらは炎が弱点なので、火を見せただけで勝手に逃げていくものが殆どだった。

「それにしてもこの森、とても深いですね」

「当たり前だろう。だから、入る前に少し考えようと言ったんだ」
「実際には言っていないじゃないですか」
「それくらいは察しろ」

俺たちがグチグチと言い争いをしていると、右方にある草の塊がガサガサと音を立てた気がした。

俺は魔物か、と松明代わりに使っていた杖をそれに向ける。だが、あっちの方から逃げるような音は聞こえてこない。おかしいな、と俺はもう少しだけ杖を草の塊に近づけてみる。

「オオオオオオオオオ……………ッ！」

すると、草の塊から人型の何かが現れた。

基本的には黒色で所々爛^{ただ}れてピンク色が露わになっている皮膚を持ち、瞳は完全に見えなく白目を剥いていて、そして人のものとは思えない地獄の底から響くような声を出してくる。

そう、それは紛れも無くゾンビそのものだった。屍に異常な数値のmanaが取り付き、人間ではなく魔物として復活した化物。

「……………ウォッ！」

ゾンビは鋭い爪を俺の顔目掛けて下ろしてきた。俺はそれを間一髪で避けると、情けないが悲鳴に近い声を上げて只管前へと疾走した。すると、後ろの方から待ってください、と叫びながらついてくる鈴刃の声が聞こえた。しかし、止まったら一気にゾンビに押さえつけられそうで、その恐怖が俺にブレーキを掛けることを忘れさせていた。

「ハアハア……………あれは……………？」

「酷いですよ……………いきなり全力疾走するんですから、……………あら？」

あれは何でしょうか？」

俺たちの視界に映ったのは、森の中にひっそりと佇む館だった。入り口には立派な門扉もついていて、それなりに大きさはある。

すると、急に閉ざされていた門扉が不気味な音を立てながら開いた。

俺はあまりにも陳腐な展開に、鈴刃に絶対入ってはいけない、と伝えた。勿論、彼女も考えていることは同じだった。そして、右から回ろうと館を囲む塀を沿うように歩こうと足を踏み出した瞬間、その方向から再びゾンビが出現した。

俺たちは再び狂ったような悲鳴を上げて、何を思ったのか門を潜ってしまった。そして、二人が潜ると同時に、門は物凄い勢いで再び閉ざされた。

「……………これ、やつちまったな」

だが、入ってしまったからには塀を乗り越えることも出来なさそうなので、館の中に入って脱出のヒントを探す事にした。

第十九話 詮索

館の中に入ると、視界には大きな扉が数箇所と二階へ続く螺旋階段が見えた。辺りを見渡す限りでは魔物の姿を確認する事は出来ない。不幸中の幸いと言ったところだろうか、俺は緊張により溜まった息を吐き出した。

「ここはもう使われていないようだな、シャンデリアも床に落ちて粉々になっている。鈴刃、くれぐれも転倒には気を付けろよ。ガラスで怪我をしてしまわれては困るからな」

「分かっています。しかし、なんとも殺伐とした場所でしょうか……。更に奥からは不穏なマナの気配も伝わってきます」

「そうか？ 俺には感じられないが……」

「マナに触れる時間が違いますからね。私もここに来て二年くらいしてから微量なマナを感じ取れるようになりました」

鈴刃は鼻にかけるような口調で喋ると、とりあえず奥に行ってみましょうと俺に促してきた。

ここにおいて何かが変わるわけでもないで、多少の緊張と恐怖に手の先を震わせながらも俺はここから真っ直ぐにある部屋に行くことにした。

ガラス部分が粉碎されたシャンデリアを避けながら、俺たちはその扉の前に立った。

そして、俺は金色のドアノブをゆっくりと握った。少し汗が滲んでいて、それを捻る時に多少滑ってしまったが、扉は錆びた金属を擦るような音を立てながら開いた。

そして俺たちが部屋の中を覗くと、そこは真ん中に大きい長方形のテーブルが置いてあった。所々に皿が数枚置かれてもいるところから、ここは食堂だと思われる。

「奇妙な場所だ……、何で皿が片付けられもせずに置かれているのだろうか」

「それに関しては頷けます。もしかしたら、ここの館は何か事件があった場所なのかもしれませんね。それに、私たちが最初にここを見つけた時、いきなり門が開いたでしょう？　もしかしたら、ここにはゴースト系の魔物がいるかもしれません」

「死屍系にゴースト系か……、本当に嫌になるような森だな」

俺は頬を伝っていく汗にくすぐったさを感じながらも、拭う手も動かさずに口を引き攣らせて笑った。

ゴースト系の魔物とは、魂の無い屍にマナが吸収した死屍系とは違い、怨念や魂などにマナが結合して魔物化してしまったものをいう。基本的には、壁や扉を貫通することが可能で、人の視界に映らない状態でいることも出来る幽霊などが一般的だ。地球では幽霊は都市伝説やオカルトでよく話される科学的に証明できない存在だったが、この世界では普通に存在するものらしい。

しかし、俺は実際に幽霊と遭遇したことが無いので、左胸に触れてみると心臓が激しく鼓動しているのがよく分かる。

「じゃあ、お前が感じるマナの気配も、もしかしたら幽霊なのかもしれないな……」

「亮介君……、まさか怖いんですか？」

俺の異変に気づいたのか、鈴刃は嘲笑するような表情で尋ねてきた。

俺は何を隠すこともなく、彼女の質問に対して素直に答えた。

「当たり前だ、怖いに決まっているだろう」

「普通、そこは怖くないと隠したりしますよ？　本当に亮介君って

面白い人ですね」

鈴刃は言っていることとは裏腹につまらなそうな顔をした。

「お前……出会った頃とキャラが変わってるぞ……」

「それだけ私と親しくなったと思ってくれれば、あなたにとっても悪いことは無いでしょう」

鈴刃はまるでこの状況を楽しんでるかのような笑顔で言った。

そこで俺が呆れ果てた表情を浮かべようとした刹那、何かが割れる音が三回くらい連発して聞こえた。

俺はサツと杖を構え、鈴刃は刀の柄に手をかける。だが、その音はテーブルの上に置いてあった皿が、床に落ちた時に割れたことによるものだった。

しかし、俺たちは皿またはテーブルには一切手を触れていない。それにも関わらず、テーブルの端に置いてあったわけでもない皿が落下するのは不自然にも程がある。

「ポルターガイストでしょうか？ 何かと物騒な洋館ですね」

「チッ、最悪だよ。何でこんな所に入ってしまったんだ」

俺は破損されて粉々になった皿を見つめながら、ここに入ってしまったことを後悔するように舌打ちをした。

「とりあえず、もう奥の部屋に行きましょう」

しかし、どれだけ奥の部屋に進もうが、どれ一つ怪しいものは見つからなかった。

俺は長く幽霊屋敷に閉じ込められていることにストレスを感じながらも、一度入り口の方に戻った。そして、螺旋階段を上って二階

の部屋を詮索することにした。

一階が大広間など大人数の人間が集まるような部屋が多かったのに対し、二階は個人の部屋が多かった。

そして、俺は階段から一番遠い場所に位置する扉を開けた。

「ここは……少女が暮らしていた部屋でしょうか？ 何だか可愛らしい部屋です」

俺たちが入った部屋は、天蓋付きのベッドやそこに置かれている熊のヌイグルミなど、女の子が暮らしていただろうと思われる場所だった。

だが、その部屋も酷く荒らされていることには変わりなかった。

また、俺はこの部屋に入った瞬間から、天蓋ベッドのカーテンに赤い染みのようなものが付いていることを見つけていた。そのカーテンは中の様子を隠すように、しっかりと閉ざされている。

俺は恐る恐る、そのベッドに近づいてカーテンに手をかけた。そして、覚悟を決めたように唾を飲み込むと、一気にそれを開けた。

『エヘッ、見つかつちゃった……』

ベッドの毛布の上には、チョコンと体育座りをしながら舌を出している少女がいた。ブロンドの髪はよく手入れされているのか神々しさすら感じる輝きを発しており、大きく開かれた瞳は海のような青色を帯びている。年の頃は小学生くらいだろう、お嬢様のような少女だった。

しかし、彼女の肌や着ている白いワンピースはこころなしか透けているようにも見えた。

第二十話 霊

いや、決して気のせいではない。彼女の身体は確かに透けていて、本当は陰に隠れている筈の毛布の花柄が確認することができる。

俺は不気味さと気持ち悪さに顔を顰めた。自分の顔から血の気が引いて、青くなっていく様子がよく分かる。

しかし、目の前に座っている少女は依然として笑顔を崩さない。

そして、彼女の言葉。彼女は俺らとかくれんぼでもしていた積もりだったのだろうか。

「あなたは……？」

恐れる様子を全く見せずに、鈴刃が少女に訊いた。

俺は幽霊らしき少女を見たというにも関わらず、飄々とした態度でいられることに甚だ驚かされた。必ずとは言わないが、俺だったら何も言葉を発せずに睨めっこをする気がしてならない。

「わたし？ わたしはフロート、フロート・マードー。ここの家に生まれた時から住んでいるんだ」

「フロートですか、甘そうで良い名前ですね」

「お前、捉え方がおかしいぞ……」

鈴刃が手を合わせながら笑顔で言うものなので、俺はその横で呆れ果てたように突っ込みを入れた。

フロートと名乗る少女は、ここの家の子供なのだそうだ。まあ、ここのベッドの上に座っているくらいだから、逆にここの家のものではないとおかしいだろう。

「それじゃあ、フロートはここで何をしているの？」

鈴刃がフロートに優しい微笑みを向けながら尋ねる。しかし、フロートは目を瞑って首を横に振った。

「分からないの。でも、お家の人はみんな死んじやった。変な人たちがお家に来て、お父さんもお母さんもお姉ちゃんもお手伝いさんも食べちゃった……」

フロートの言葉に、俺と鈴刃の眉がピクリと動く。無論、彼女が零れるような口調で言った『食べる』という単語についてだ。

この森の周辺には死屍系の魔物がいる。恐らく、フロートの家族はそいつらに殺され、食されてしまったのだろう。死屍系——特にゾンビは栄養素を必要としないにも関わらず、本能のままに人間を見つけると食したい衝動に駆られる。

そして、そいつらは大人数で行動して一人の人間を追い詰め、その強靱な顎と手で肉を引きちぎり、ちゃんと消化機能が働いているかも分からない胃袋に納めるのだ。

死屍系には感情というものが存在しない。本能的に上級魔物には従うが、いくら強い気を発している人間がいても、ウルフやその他の魔物のように怖じて逃げ出すことはしない。

フロートは確実に自分の家族と一緒に、ゾンビに肉を喰われて死んでいる。だが、彼女は死屍系にもゴースト系の魔物にも変化していない。推測ではあるが、俺たちが見ている彼女の姿は自縛霊であると考えられる。マナの力にも頼らず、ただ自分が死んでしまった理由が分からず、この世界に取り残されてしまった可哀そうな魂だ。そして、俺たちをここに連れ込まれたのも、彼女が無意識のうちに救援信号を出したことによるものだろう。

「わたしは、知ってるよ。わたしも、その人たちに殺されちゃったこと……。でもね、わたしは何故かずっとここにいたまま、お父さ

「んたちと一緒にの場所にいけないんだ」

フロートの大きく開かれた可愛らしい目からは涙が零れそうな勢いだった。小さな女の子の泣き顔には俺も鈴刃も耐性が無かったので、ばつが悪い表情を浮かべるしかなかった。

「ねえ、お願い。ここにいる悪い人たちを倒して。じゃないとわたし……ずっとここにいたままになっちゃう……」

フロートの目尻には既に大量の涙が溜まっていた。

俺も鈴刃も言葉を失ってしまう。フロートは何年もこの地獄のような場所で独りでいたのだ。だから、彼女の言葉には決して俺では表現することのできない迫力で満ちていた。

ここでもし、俺が彼女の願いを断ったなら、セレナの一件で廃れていた漢がもはや廃れ果ててしまうだろう。

俺は会ったばかりのフロートの願いに、首を縦に振らないわけにはいかなかった。

「分かった。俺がここにいる悪い人たちという奴らを倒してきてやる。お前は、ここでじっとしてることだな」

「フロートちゃん。こういうことは私と亮介君に任せてくれればいいから」

俺は後ろを振り向きながら、鈴刃はフロートの頭を撫でながら言う、噴き出す直前の薬缶のようだった彼女の目から一瞬にして涙が引いた。

そして、彼女は思わずこちらの表情も緩んでしまう程の満面の笑みを向けてくれた。

「ありがとう！」

その純真無垢で無邪気な微笑みを、決して壊してはならないと俺は感じていた。

「ただ、一つ訊いていいか？ 食堂で皿を落としたのはお前の仕業か？」

「え？ いや、わたしは何もやってないよ」

「そうか。ならいいが……」

あの時のポルターガイスト。俺にはどうも不自然な気がしてならなかった。

何か、きつと不吉なことが起きる気がする。強力で凶悪な敵が、現れてくるような気分に一瞬だけ俺は苛まれた。

第二十一話 撫で方

フロートの言葉から察するに、魔物はこの洋館の中に潜んでいると考えられる。しかし、俺たちは一度もそれらしき姿を見ていない。即ち、奴らは隠れた部屋にいる可能性がある。まずは、そこを探さなければいけない。

「しかし、当てはあるんですか？ 意味もなく、適当な場所を探すだけでは無駄ですよ？」

「分かってる。だが、当ては無い」

俺は右手で顎を軽く擦りながら答えた。しかし、一番怪しいのは一階の食堂付近だ。あそこではポルターガイストに似た現象に遭遇することができた。つまり、あの周辺から探すのが効率的だろう。

「まずは食堂に行こう。あそこなら、何か見つかるかもしれない」

「皿が落下した場所ですか……、確かに怪しいですね。分かりました」

俺はフロートに背を向けて、すぐにでも部屋を出る準備をした。その間、鈴刃はフロートの小さな頭を子供がヌイグルミを大事にするのと同じようにゆっくりと撫でた。フロートは気持ちが良いのか、猫のように目を細める。

そして、鈴刃は名残惜しそうにフロートの頭から手を離れた。

「いつてらっしゃい……死なないでね」

「大丈夫ですよ。私は絶対に死なないです」

絶対にこの洋館を安心できるような場所にすると約束して、俺と

鈴刃はひとまず部屋を後にした。

「亮介君、食堂に行きましょう。あの時感じたマナの気配……今度は集中して探してみたいと思います」

「そうか。マナの探知は俺にはまだ出来ないからな。頼むぞ」

そして俺たちは螺旋階段を下って、入り口から垂直の位置している扉を開いて、食堂に入った。

部屋の中は相変わらず殺伐とした雰囲気を持っていた。片付けてはいないので、割れた皿はそのまま放置されている。

「それでは、私はマナの在り処を探知します。少し、待っていてください」

俺は首を縦に振った。

そして、俺は壁に寄りかかりながら、鈴刃がマナを探知するのを待つ。

鈴刃がゆつくりと目を瞑った。少し小柄な可愛らしい身体、大和撫子という言葉が相応しいまでに整った顔立ち。そして、薄ピンク色に染められた唇。

俺の頬は無意識のうちに紅潮していた。それほどまでに、鈴刃という少女は美しかった。

俺はそんな鈴刃の顔をもう少し近くで見たいと思った。

目を閉じながら涼しそうな顔で立っている鈴刃へと、俺は少しずつ近寄っていく。

その瞬間、彼女の目は大きく開かれた。俺は驚きと我に返ったことによって気づいた恥ずかしさで、顔を林檎のように真っ赤にしながら尻餅をついた。

「……？ 何やってたんですか？」

鈴刃が怪訝そうな顔で訊いてくる。

「いや、なんでもない……」

本人を目の前にして、近くでお前の顔が見たかった、なんて口が裂けても言えるわけがない。

俺はそつと自分の左胸を押さえる。精一杯何事も無かったような顔をして、心臓の鼓動は正直だった。

「まあ、いいです。それより、マナの気配が分かりました」

鈴刃は嬉しそうにポンと手を叩いてから言った。俺は喜んでいいのか、これから死屍系の魔物と戦わなければならないことに不満を覚えればいいのか、非常に複雑な心境だった。

しかし、これを遂行しない限りには、閉じられた門も開くとは思えない。

俺はごくりと唾を飲んでから、鈴刃に気配の在り処を訊いた。

「それは……下です」

「下？」

俺は小首を傾げながら、右手の人差し指を下に向けた。鈴刃は何も言わずにくぐりと頷く。

「下に地下室か何かがあるんだと思います。そこから、禍々しいマナの気配がします」

その禍々しいマナとやらの気圧されたのか、鈴刃の頬には一滴だけ汗が伝っていた。俺には全くそれが感じられないが、彼女の少し

焦ったような表情を見ただけで、地下室に潜んでいるであろう魔物の恐ろしさが伝わってくる。

「まずは、地下室へ繋がる階段を探しましょう」

「それなら、フロートに訊けばいいんじゃないか？」

「それもそうですね。それでは、フロートちゃんの部屋に戻りますか」

俺たちは食堂を後にして、二階にあるフロートの部屋を再度訪れた。

天蓋付きベッドのカーテンは開いていた。そこに、ちょこんと体育座りをしているフロートがいた。

彼女は俺たちに気づくと、ベッドから身体を出して近寄ってきた。

「何か、あったの？」

「いやな……ここに地下室ってあるか？」

「地下室？……ううん、分からない。でも、お父さんの部屋に、

何処のものか分からない鍵がたくさんある」

「鍵か？　そういえば、鍵が掛かっていた扉が何処かにあったよな？」

「ええ、入り口から見て左の扉を進んだ所に一箇所ありました」

鈴刃は何か確信を持ったような顔で言った。恐らく、地下室はその鍵が掛かっている扉の先にある筈だ。

「それで、お前のお父さんの部屋ってどれだ？」

「この隣だよ」

「そうか、ありがとな」

俺はフロートに感謝すると、あまりキャラには似合わないが彼女

の頭を撫でた。

フロートは目を細める。そして、俺が手を離すと同時に目を見開いて、俺に言い放った。

「撫で方が雑だよ。痛かった」

俺は胸に何か突き刺さるような錯覚を感じた。

そんな俺の背中を鈴刃はポンと叩いて、早くフロートの父の部屋に行こうと促してくれた。

第二十二話 扉の先

フロートの父が使っていたと言われる部屋は、クシャクシャに丸められた紙屑や机などの木材の破片で散乱していた。ベッドと思われるものは瓦割りをした後の瓦のように真つ二つに折られており、窓ガラスも当然のように破損されている。

しかし、この風景は殆どの部屋に対して言えることなので、俺にしてはさほど気になるものではなかった。

俺たちは地下へ繋がる扉を開ける為にこの部屋から鍵を探さなければならぬ。この部屋の汚さは物を探すという目的には、少し都合の悪い場所だ。

「何処も彼処もこの有様か。こっからどうやって鍵を探せばいいんだか」

「とりあえず、あそこの壊れた机の周辺から探すのが無難でしょう」

俺は鈴刃に言われた通り、ズタズタに壊された机の周辺を探すことにした。木材やガラスの破片は刺さる危険性があるので、探す時には最新の注意を払う。

机の周辺には破れてちゃんと読む事はできないが、何かの書類や資料らしきプリントが散らかっていた。

俺たちは海老のように背中を曲げながら、それらを両手で掻き分けていく。

すると、意外にも早く鍵が見つかった。俺はそれを右手で摘み、自分の頭より上げて見つめる。

「恐らく、これが鍵だろう。それじゃ、さっきの扉に行くか」

「そうですね。開くか開かないかはともかく、一度試してみましよう」

俺たちはこの部屋を後にして、一階にある開かない扉へと向かった。

一階の入り口から一番左に見える部屋を潜り、そこから更に奥へ奥へ進んでいく。

そして、俺たちは嚴重に閉ざされている鉄製の扉の前に立った。今思えば、この扉だけ鉄で出来ているのだから、それだけ先には秘匿したい何かがあるのだろう。

「ここから先は危険な魔物がいるだろう。扉を開けた瞬間から警戒は怠るなよ」

「分かっています。亮介君こそ気を付けてください」

俺は震えている右手の先で鍵を摘み、それを鍵穴へとゆっくり指した。ガチャリと鍵穴が音を立てる。

そして、俺は今度はドアノブを掴み、それを捻った。

分厚い鉄で造られている為、ドアを開けるのは多少の力を要したが、無事に扉を開くことができた。

扉の先には地下へ続くのであろう階段があつた。側面の壁には電球の灯りが点いていて先はよく見える。

まだ、この段階では魔物の姿は確認できない。

その静寂しじまの空間に、俺たちは足音を重ねていく。一步一步進むたび、俺にもマナと思しき何かを感じ取ることができた。まるで、新鮮な空気の漂う森の中を歩いているような気分だ。

「あそこ……踊り場のような場所があるな。カーブの先が死角になるから気を付けろよ」

「はい。まだ、マナから正確な位置を探すことは出来なくて……申し訳ありません」

「別に謝る必要なんてないさ。俺なんて一階からじゃマナすら感じ

取れないし」

この状況では、謝る方は寧ろ俺だと思う。しかし、この場所で謝る立場を譲り合っている暇は無い。俺は早くも杖先に炎を浮かべながら、ゆっくりと踊り場まで下った。

その瞬間のことだった。踊り場の死角から人影のようなものが現れた。黒く焦げた皮膚に疎らに見える薄桃色の肉が痛々しい、魂の抜けた容かたちの末路だ。

ジジイからの話によると、ゾンビという魔物は五感の全てが遮断されているのだが、マナだけは感知することが可能で、そこから近くに何かあるのか知ることができるそうだ。

つまり、俺たちの姿は視力を持っていなかろうが奴らには見えているわけだ。

「出やがったな……ッ！」

俺は予め具現化あらわしさせていた炎を、目の前にいる動く屍に向けて放った。ゾンビは炎に全身を包まれ、ジタバタと暴れ始めた。この魔物は不思議なことに、マナで作られた魔法ではダメージを与えることができないらしい。だが、物理攻撃や普通の炎でも脳を破壊したり首を斬れば、機能を停止することができる。

やがて、ゾンビは本能が己の機能停止を指示したようで、マリオネットの糸が切られた時のようにバタリと地面に伏した。

だが、安心したのも束の間。俺たちが更に下へ行こうとすると、まるで地球でよく見ることできた駅の階段を上るサラリーマンのように、大勢のゾンビたちがこっちへ向かって階段を上ってきた。

「何処のゾンビ映画ですか……。亮介君、ここは私に任せてください」

そう言うのと鈴刃はゆっくりと刀の柄を握る。そして、彼女はカッと目を見開くと、抜刀してそれを横に振った。

刀から発された衝撃波がゾンビたちの首を薙いだ。頭と身体を切り離されてしまったゾンビは動くことを止め、順にバタバタと将棋倒しのように下へ倒れていく。

「流石だな。こういう大勢を相手にするときはお前に任せるよ」

「そうしてもらえるとありがたいです」

鈴刃は刀を構えたまま、こちらを向いて微笑んだ。普段はやはり俺と同じくらいの歳の顔をしているのに、笑っている時は純真無垢な小学生のようにも見える。口に出せば彼女に怒られそうなので、口はしっかりと噤んでおく。

運良くゾンビの二群目が現れることはなく、俺たちは地下階へと降り立った。だが、俺たちの進む先にはまた扉のようなものがあった。さっきのような鉄製ではなく、鍵も付いていない。

この奥に何があるのだろう、と俺は不思議に思った。

首を傾げている俺の横では、身体と刀を震わせて怯えている鈴刃がいた。

「この先に……夥しい量の邪悪なマナが感じられます……。亮介君、この先にいる魔物は、おそらく一筋縄ではいきませんよ……」

「そ、そうか。分かった」

確かに集中してみると、この先から俺でも感じ取れる程の強いマナが放出されていた。

すると、俺の額から一筋の汗が流れてきた。それは目と目の間を縫って、鼻頭までやってきたので妙にくすぐったかった。

だが、そんなことを気にする余裕も無く、俺のさっきより激しく震える右手がドアノブを掴んだ。

それを捻るまでには、深呼吸をして落ち着くまでの時間を要した。

「それじゃ、開けるぞ……」

俺は覚悟を決めて、ドアを開けた。

すると、中から酷い異臭が漂ってきた。今までに俺は納豆や植物系の魔物や腐った生き物の死体など様々な臭いを嗅いできたが、その中では腐った生き物の臭いに酷似していると思う。

しかし、俺たちが嗅いでいるその臭いは、その比ではなかった。逆に扉を開く前は、この臭いが気にならなかったのか謎に思っくら
いだ。

それでも、耐えられなくて悶絶する程のものではなかった。俺は少し我慢をして、部屋の中へ足を踏み入れた。

「あら？」

部屋の中に入った瞬間、鈴刃が不思議そうに首を傾げた。俺は何が起きたのか彼女に訊く。

「何故かマナの気配が消えました。どうしてでしょう……？」

「でも、周りには何もいないし、俺たちの気のせいだったのか？」

「それはありえませんよ。亮介君もあの強いマナを感じ取ったでしょう。あれが気のせいだなんて……」

俺たちはもう少し足を進めて、部屋の中央にまでやってきた。この部屋は結構広さがあり、地球のもので例えると二五メートルプールくらいはある。しかし、その中は殺風景で何も置いてない。

また、歩いた時に気づいたのだが、床がベトベトしているような気がした。足を進める度に、靴が床に張り付くような感覚がしたので非常に不快だ。

しかし、そのお陰で俺は敵の正体に気づくことができた。俺は杖を構えて、一気に後ろへ振り返る。

「やっぱりな……。でも、こんな気持ち悪い奴が相手になるのかよ……」

俺が仰々しく振り返るので、鈴刃も一緒に後ろを振り向くと、彼女も敵の存在に気づいた。

この部屋の扉付近の天井に張り付き、赤く光る小さな目でこちらを見据えている魔物。地球では塩をかけると消えるなど言われ、雨などに岩によく張り付いてたりしていた生き物に似ている。

「な、ナメクジの魔物ですか……」

鈴刃が顔を青くして、気味悪そうに言った。

そう、俺たちを見ているのはナメクジを大きくしたような魔物だった。そのサイズは目測だが、ざっと二メートルはある。

「鈴刃、気持ち悪いか？ 戦うのは無理そうか？」

「……い、いえ、そんなことはありません」

「そうか。なら、早めにあの塊を焼き尽くすぞ」

俺はこちらを眺めたまま動こうとしないナメクジを睨みつけると、いつもは片手で握っていた杖を両手で持って構えた。

第二十三話 焰

俺は心の中で燃え盛る焰の揺れ動きを思い浮かべる。俺が炎魔法を繰り出す時に、いつも頭の中で思い描いている光景だ。薄暗い静寂の中で存在感を放つ炎色は、俺が精神を集中させるのに最も適している。

そして、俺が持っている杖の先から鮮やかな赤色の炎が出現した。それは螺旋状に渦を巻き、ナメクジの巨軀へと迫っていく。それでも相手は決して動くことなく、俺の攻撃は胴体に直撃した。

俺はナメクジにざまあみろ、と言わんばかりに右手を杖から離してガッツポーズを取った。

「やったか!？」

「いえ、まだのようですね」

俺の隣にいる鈴刃が、ゆっくりと頭を振った。

彼女の言う通り、ナメクジの身体には火傷の一つも見られなかった。あの鈍重な身体に、俺の魔法を往なす俊敏さなど持ち合わせているようには見えない。つまり、奴は俺の攻撃は直撃しようが効かない。

この戦いはもしかしたら長引くかもしれない、と俺は舌打ちをした。

依然として、ナメクジは自分から動きを見せる様子はない。俺の攻撃が効かないと知った今にとっては、まるで奴が俺に攻撃してこいよ、と煽っているような気がしてならない。

「次は私が行きます」

そう言うと、彼女は今いた位置より一歩前に出た。そして、ゆっ

くりと刀の柄に手を添える。俺は刀に関して素人なので詳しくは分からないが、居合の構えなのだろうか。何にせよ、目的が目の前にあるわけでも鈴刃に向かつてくるわけでもないのに、居合の構えをするとは不思議な光景に思えた。

しかし、それは鈴刃が魔法を使えるから、見られる光景なのだろう。

鈴刃は精神を研ぎ澄ます為か、ゆっくりと目を瞑った。そして、数秒待って、やっと彼女の目が開かれた刹那、彼女の刀の柄を握る右手が動きを見せた。

刀が鞘から勢い良く抜かれた。同時に、目には見えないが、空が斬られる音を響かせる衝撃波が放たれた。まさに速さ的にも文字通りにも、目に止まらぬ攻撃だ。

そして、それは一直線にナメクジの巨軀へと直撃する。その瞬間までは、俺の炎魔法と同じ光景だ。

俺は確信していた。これなら奴の身体を斬った、と。

「何故なのでしょう？ 何故、あの魔物には私たちの攻撃が効かないのでしょうか……」

俺が口元が綻んだ表情で鈴刃の方を窺うと、彼女は血の気の引いたような褪めた表情を浮かべていた。

その様子に俺の顔色も次第に青褪めていく。

もう一度ナメクジの方を向くと、奴の身体には切り傷の一つ見られなかった。一度は確信を持ったものの、結果は俺の魔法と全く同じだった。

そして、ようやくナメクジが自ら動きを見せた。決して攻撃をしようというわけではなかったが、のそのそと天井を這っていく。まるで壁に付いた微量の水滴が流れ落ちるような遅さだったが、さっきまでとは明らかに違う何かが奴から感じられた。

部屋の中に籠もる空気が一瞬にして、肺を癒してくれるような澄

んだものになっちゃった。だが、同時に体中が寒気のようなものに取り付かれ、自分の腕を見ると鳥肌が確認できた。

また、隣では身体を震わせて、粘膜でベタベタした床に両膝を突いた。

「マナ……です」

そして、フルフルと揺れる彼女の唇から、雑踏の中なら絶対に聞きとれないような小さな声で言葉が発された。

俺は納得した。奴は今まで隠していたマナを一気に放出したのだ。小柄で華奢な鈴刃の身体には堪える量のマナなのだろう。俺はまだ悪寒のようなものを感じるだけで済んでいるが。

「恐らく、私たちの攻撃は奴に吸い込まれていたんです……。魔法系統の技は一切奴には効きません……」

その話は鈴刃の推測であるため確証性はないが、それ以外に浮かぶ考えなどあるわけもない。奴は本当にドレインの力を持つ魔物なのだろう。

ドレインとは、その名の通りマナを吸収して自分の力に変換する能力のことだ。マナドレインとも呼ばれたりするその力の前では、マナで形成されている魔法攻撃は無効に等しい。

そのようなドレインを持つ魔物に対抗するには、刀や剣などの物理的な攻撃を与える他ない。

しかし、俺に鈴刃の持つ刀を扱うような力はないし、俺が持っている杖ではろくなダメージも加えられない。

だが、ナメクジの巨軀を眺めているうちに、俺はある不思議なことに気づいた。

「何だ？ 奴の身体が大きくなっている気がする……」

そこまで言いかけると、俺はあることに閃いてパンと手を叩いた。

「マナを溜めるのも限界があるってことか……」

つまり、奴の身体はマナを溜める度に膨張している可能性があるというわけだ。まだ確かな根拠は無いが、それを掴む為に俺は奴に炎を放った。

違いを分かりやすくするために、炎の威力は敢えて上げておいた。そして、炎の渦は再びナメクジの巨軀に直撃した。その時、俺は確かに奴の身体が大きくなるのを自分の目で捉えた。

「鈴刃、まだ攻撃はできるか？」

「……あ、はい。大丈夫です」

鈴刃は少し苦しそうに片目を瞑りながらも立ち上がった。どうやら彼女も俺が意図することに気づいたようだ。

「無茶はするなよ」

「任せてください」

そういつて鈴刃は刀を横に振った。それと同時に俺も両手で杖を持ち、激しく燃え盛る焰のざわめきを思い浮かべた。

第二十四話 第六感

俺の炎魔法と鈴刃の風魔法が同時に放たれる。そのスピードは鈴刃の魔法が一步速いため、ナメクジの巨軀にギロチンのような風が当たり、遅れて渦を巻いた炎が直撃した。

無論、ナメクジの身体には傷一つ付いていない。代わりに奴の身体は目で見て分かるほど大きくなっている。最初より一回り近くは巨大化したのではないだろうか。

依然として薄暗い部屋の中で、ナメクジの目が放っている赤い光は不気味に思えた。攻撃をしてこないというのも尚更おかしい。何か大きな一発が来る気がしてならない。

「しかし、亮介君。私なら刀で直接ナメクジに攻撃できると思うのですが、魔法を使わなければ駄目なのですか？」

「いや、それが一番手っ取り早いんだが、奴に近づくのは不気味に危険な気がするんだよ」

根拠は持ち合わせていない。しかし、人間には危険予知をする感覚を持っていると聞いたことがある。所謂第六感というものだろうか。地球にいた頃、テレビでそれについて取り上げた番組を見たことがあったのだが、俺が感じているものはそれなのだろうか。ただ、それを調べる術は今の俺には持ち合わせていない。

依然として、俺たちは魔法をナメクジに向けて放っている。これで何回目になっただろうか。だが、俺たちの攻撃により、着実にナメクジの身体は肥大化している。俺の思惑が上手くいけば、奴の身体は後数発でもたなくなる。

飽きるくらい焰の揺れ動きを頭の中で思い浮かべた気がする。それによる集中力の低下に加え、魔法を放つ為のマナの現象が感じ取れる。

「しぶとい奴め。これで最後だ」

俺は大剣を構えるように両手で杖を持った。そして、俺は残った力を振り絞り、精一杯の炎を出現させた。炎は球体状に纏まっている。大きさは地球にいた頃、運動会で転がしていた大玉くらいはある。

力の強い魔法を放つには、その分反動もあるようで、俺の身体は少しずつ後ろに退かれていく。

それでも、俺は歯を食い縛りながら、その大球を放った。マナが燃え盛る重い響きを奏でながら、まるで隕石のように直線に飛ぶ。普通、これほどの威力を持つ魔法を放てば、この部屋が崩れるのは明瞭だが、その威力も含めてナメクジが吸収するので、出し惜しみをする必要もない。

そして、水素に火を点けたような爆音が鳴った。恐らく、ナメクジが魔法を吸い込んだときの音だ。吸収するマナの量が多い分、今回だけ俺たちの耳に届いたのだろう。

俺は後ろに倒れないようにバランスを取ると、すぐさまにナメクジの状態を確認した。

ナメクジは俺の一発で著しい肥大化を遂げた。もし、奴が人喰いの魔物だったら、俺や鈴刃など一呑みで奴の胃に収められてしまいそうだった。

だが、奴の身体はすぐに縮小した。まるで、空気の入ったボールに穴が開いたように、目で確認できるほどの青白いマナが放出されている。

これほどのマナを動物が浴びたら危ないかもしれない。だが、前も言ったように人間はマナに対して耐性を持っているので、この何倍ものマナを吸収しない限り、魔物化する心配はない。逆に、放ったマナが戻ってきたので、俺たちにとっては好都合だ。

俺は笑顔で鈴刃に声を掛けようと思った。だが、口を開く直前で

俺の顔中の筋肉が固まり、上手く言葉を発することができなかった。

「……………ッ!？」

突如、今までに感じたことのない悪寒が俺を襲った。まるで、服の中に氷をそのまま入れられたようだった。勿論、原因は分からない。ナメクジの魔物はマナを出し切って、よれよれの紙風船みたいになったし、脅威になるような魔物は見つからない。

そこで俺は閃いた。もしかしたら、俺が危険だと予知していたのは、ナメクジではなく他の何かだったのかもしれない。すると、ナメクジを倒した後でも悪寒を感じるのも頷ける。

俺はもう一度、魔物がいた場所を見つめた。そこには、さっきのような巨大な軟体動物はいない。しかし、そこからはまだ僅かにマナが放出されている。

俺たちは決して、マナを受けても魔物化はしない。じゃあ、この近くに人間じゃない何かがいいたら？ それは、魔物化するのではないだろうか。

「……………そういうことかッ!」

「何がですか？」

俺が絶望を味わったような表情で立ち尽くしていると、隣にいた鈴刃が呆然とした表情で俺の顔を見つめた。

俺は勢いよく鈴刃の手を握った。これは焦眉の問題だ。この多大なマナが、ナメクジとは比較できないほどの危険を呼び寄せている。

「フロートは館に残った少女の魂だ。もし、このマナを過剰摂取してしまつたら……………」

俺が核心部分について話す。すると、鈴刃は顔面蒼白の状態にな

り、そのまま固まってしまった。

俺はナメクジを倒そうとするあまり、そのリスクについて見落としていた。

ここにいる魔物を倒すよう依頼したのはフロートだ。そして、彼もまた人間ではなく、実体を持たない幽霊だ。幽霊は人間とは違い、マナの耐性が非常に低い。つまり、多量のマナを摂ってしまえば、彼女はすぐにでも魔物化してしまうわけだ。

「亮介君、すぐにフロートちゃんの部屋に行きましょう」

「分かった。だが、これから先は本気で危ない。絶対にマナを無駄遣いするなよ。ゴースト系の魔物には物理攻撃など一切効かないからな」

鈴刃が頷くのを確認すると、俺たちは走って地下室を出た。そして、入り口まで戻ると、二階に続く螺旋階段を変わらぬペースで上った。

そして、俺は二階の一番端にある、部屋のドアを開けた。

その瞬間、俺たちは突風に煽られるように、身体を浮かせて後ろに飛ばされた。一階に落ちないように設えられた柵をも越えて、俺は一階の床に背中を強打した。鈴刃の方は軽い身のこなしで、しっかりと足で着地したようだ。

俺は少しの間、悶え苦しんだ後に、顔を歪ませながらも立ち上がった。そして、俺の視界に、平均的な女性の二、三倍はあるような大きな姿を持った女性が映った。姿はまるで二十代後半くらいで、目は閉ざされている。何処か慈愛に満ちたような表情だった。だが、身体は透明で奥の壁を確認することができ、また、彼女の身体は宙に浮いている。

「フロート……か？」

俺がそう呟くと、女性はゆっくりと閉じられていた目を開いた。
その瞬間、鈴刃がいきなり床に伏した。いや、何かの力によって
押さえつけられた、という方が正しいのだろうか。

女性は俺たちの姿を見下すように眺めている。それは、罪人に天
罰を下す神様の姿のようだった。

第二十五話 闇属性

額から大粒の汗を流しながらも、俺は両手で杖を構える。一度だけフロートの表情を見据え、そしてゆっくりと瞼を閉じた。戦闘中にはすぐわれない行動だが、これをしないと魔法を具現化することができない。

光が無く暗い視界の中に、煌々と燃え動く炎を移す。すると、サッカーボール大の炎の球が、杖の先で作られた。

俺は下唇を噛みしめた。元は無害だった彼女に攻撃を仕掛けるのは気が引けるが、魔物と化してしまった以上はしょうがない。

「くそ、あんな魔物になりやがって……」

そう呟きながら、俺は目を開けた。同時に炎の球がフロートに向かって放たれた。

フロートは依然として微笑みを湛えたまま、僅かも揺れることなく宙に浮いている。一度だけ俺の顔を見据えると、奴はゆっくりと目を閉ざした。

ふと、隣で床に伏されていた鈴刃がゆっくりと身体を起こした。相手の集中が鈴刃から、俺の魔法に向けられたからだ。鈴刃は凄まじいほどのGを加えられただけあって、それから解放されて一気に身体が軽くなると、嬉しそうな顔をして何回かジャンプをした。

フロートは両手をスツと、身体の前に伸ばした。すると、雷が一閃したような音を発され、同時に彼女の前に虹色の壁が作られた。まるで水の上に張った油膜のような色を持ったその壁は、俺の魔法をいとも簡単に弾き返した。

防いだのではなく、こちらに返すものだから厄介だ。俺は驚きのあまり目を剥いた。マナが燃え盛る音を出しながら、炎の球が向かってくる。

俺は新しい魔法で威力を相殺させようと杖を構えると、自分の前に鈴刃が立った。

「ここは私に任せてください」

彼女は一度だけ振り向いて笑顔を湛える。戻る際には僅かだが剣士の表情が確認できた。

鈴刃はゆっくりと鞘から刀を抜くと、まるで野球でホームランを宣告するバッターのように、刀の銛をこちらに向かつてくる俺の魔法に向けた。

そして炎魔法と彼女の刃が衝突した。一瞬、炎が彼女を包み込むようにボウと広がりを見せるが、それもすぐに治まり、炎は彼女の刃に吸い込まれた。

俺は彼女の持つ剣を見ると、その壮麗な刃に目を奪われた。まさに炎の剣と言うべきだろうか。彼女が持つ刀の刃が、渦を巻くように動く炎を纏っている。

恐らく、彼女は風の魔法を使い、炎の流れを巧みに操っているのだろう。何て器用な奴なのだろうか、と俺は甚だ感心したように目を瞠った。

そして、鈴刃は刀を右手に持ちながら、豹が駆けるようなスピードで走り始めた。勿論、彼女の剣は魔法の力を帯びているので、物理攻撃が効かないフロートにもダメージを与えることができる。

だが、俺が本当に瞠目するべきだったのは、そんな彼女の応用力ではなかった。

鈴刃は螺旋階段がある左側とは逆の右側に走り出したのだ。そこには幾ら前に進んでも壁しか存在しない。

しかし、彼女にとっては壁も床の一部なのだ。

「さっすが……………」

俺は最早フロートの存在を忘れたのか、感心したような呆れたような視線を鈴刃に向けた。

鈴刃はその俊足を活かしながら、壁を走っていた。重力なんてお構いなしとでも言わんばかりにだ。

しかし、当たり前のことを言うようでもあるが、足が速いだけでは壁なんて走れるわけがない。普通の人間ならば、最初の一步目で落下してしまうだろう。

実は、鈴刃はリザードマンの件で遭遇した巨大な蚊を相手にしたときも、あの壁走りを披露していた。あの後、俺は彼女から壁走りの真相を訊いた。どうやら、彼女は二つの方向から強い風を吹かせることによって、無謀な業を実現させているらしい。

といっても俺には到底不可能な動作だ。やはり、その部分は彼女の身体能力が大きく反映しているところもあるのだろう。俺も運動神経については人並み以上だとは自負しているが、身軽さにおいては彼女に著しく劣るものがある。

彼女は二階の床と同じ高さまで登ると、勢い良く壁を蹴って柵の上に飛び乗り、フロートの姿を見つめながら駆け始めた。

「鈴刃！ いけるぞ！」

俺は彼女の攻撃に確信を覚えた。

そして、フロートの集中を逸らせるよう、俺も魔法で応援することにした。

「火の神、カグツチよ、聖を穿つ穢れし炎を、今蘇らせよ！」

俺が杖を構えると、いつもの鮮血のように輝く炎とは反し、夜の闇のような黒い炎が現れ始める。

これは炎と闇を掛け合わせた合成魔法だ。

ゴースト系は闇と聖のどちらかの属性を含んでいる種が多い。無

論、フロートに闇の属性など含まれているわけがない。

今まで属性に関してはあまり話してはいなかったと思うが、生き物は生来属性というものを持っている。俺の場合は炎がメインで、僅かだが闇の属性が含まれている。勿論、闇を含んでいるとはいえ、完全に邪な人間になるというわけではない。ただ、フロートのように純真無垢な存在とはなりえない、ということらしい。

そして、属性には必ずしも相性が存在する。例として闇は聖に強く、また聖に弱い。少し矛盾した話にも思えるが、闇は聖に大きなダメージを与えることができるが、聖の攻撃には逆に大打撃をくらってしまうということだ。

「闇の精霊よ、世に混沌と憎悪を導き、戦乱と殺戮の世を創り給え！」

黒く禍々しい炎が、邪竜を彷彿させるような細長い形を作る。そして、昇竜の如く炎はフロートへ目掛けて宙を上っていった。

フロートが眉間に皺を寄せて、初めて焦ったような表情を浮かべる。そして、俺の魔法を弾き返した時と同じく虹色の壁を張った。

漆黒の炎と神聖な光が衝突する。さっきの炎とは威力の桁が違うので、容易に跳ね返されることはなさそうだった。

そして、柵を走っていた鈴刃が重力を無視するかのように大きく跳躍した。案の定、フロートは鈴刃のことなど忘れていたようだ。

鈴刃が刀を両手で持った。依然として刃には猛々しく燃え盛る炎が渦を巻いている。

しかし、鈴刃はその刀を振るうことなく、そのまま床に着地した。俺はそんな鈴刃の行動が理解できず、表情は期待を寄せていた時のそのまま固まり、え、と呟いた。

やがて俺の炎もフロートの壁によって相殺されてしまった。

「鈴刃！ 何をやってんだよ！？」

俺は拳を強く握り、鈴刃に怒声を浴びせる。

「だって……このままじゃフロートちゃんが可哀そうです！ 彼女が一体、何をしたっていうんですか！」

だが、珍しく鈴刃が声を張り上げるものなので、その勢いに押されて俺は言葉を失った。

しかし、彼女の言ってることは正しい。フロートはいきなり魔物に襲われて殺されてしまい、更には成仏することができずに何年間もこの館の中で過ごしていたのだ。周りには誰もいない状況で。あの人懐こい性格には、独りは相当堪えるものだったに違いない。

しかもそれだけに収まらず、今度はマナに支配されて魔物と化してしまい、俺たちとこうして戦うことになっている。あのとき、もし鈴刃がフロートを斬ってしまっていたら、彼女の魂は未練を残したまま消滅することになってしまった筈だ。

俺は、フロートのことは何も知らない。出会ってから僅か数時間の仲だ。

ただ、これだけは言える。彼女は宝石のように無邪気で無垢で、何より怖がりなだけのただの少女だ。

そんな彼女を、魔法やら魔法剣やらですんなりと片付けてしまっているわけがない。

「でも、それじゃあどうすればいいんだよ」

しかし、フロートを助けるのは難問だ。

魔物を元の姿に戻すには、その対象のマナを一定まで抜き取る必要がある。しかし、フロートは凄まじい量のマナを吸収している。それを放出しきるのを待っていたら、俺たちの身体がもち堪えられない。

「……こつから先は、私に任せてください。ちょっと、地下まで行ってくるので、フロートちゃんの攻撃に頑張って耐えてくださいね」

何か閃いたものでもあるのか、鈴刃が笑みを湛えながら俺に伝えた。

それからの彼女の動きは非常に速かった。魔法で何処からともなく追い風を吹かせ、彼女は目にも止まらぬスピードで、向かい一番左の扉を潜っていった。

鈴刃は何を考えているのだろうか、俺は不思議に思った。しかし、とりあえずはフロートの動きを封じるのが先決だ、と俺は素早く呪文の詠唱を始めるのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5426y/>

ヤンデレ逃避行 ～逃げた先は異世界～

2012年1月5日23時49分発行